1．府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」関係遺跡平成19年度発掘調査報告

はじめに

今回の調査は、平成19年度の府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」に伴い、京都府南丹土地改良事務所の依頼を受けて実施した。

室橋遺跡・野条遺跡は、亀岡盆地北端の旧丹波国に含まれる南丹市八木町に所在する。亀岡盆地の中央を大堰川(桂川上流域)が貫流するが、両遺跡はその東岸にあり、周辺は西に筏森山(標高295m)、北に諸木山(標高496m)を配し、小山に囲まれた小盆地状をなす。この地域では、近年、ほ場整備事業や府道建設事業に伴い、多くの発掘調査が実施され、遺跡の実態が明らかになりつつある。野条遺跡の南に接する低地部の池上遺跡では、18次にわたる調査により、弥生時代中期の墓域をともなう大規模集落や、古墳時代中期～後期の竪穴式住居跡群、奈良時代～平安時代の掘立柱建物跡群などが調査された。また室橋遺跡の東に隣接する諸畑遺跡では、丘陵縁辺部の調査で弥生時代後期や古墳時代中期の竪穴式住居跡の存在が明らかになっている。

室橋遺跡と野条遺跡は、平成７年度～10年度にかけて八木町教育委員会(現南丹市教育委員会)の実施した遺跡分布調査および試掘調査によって、古墳時代～平安時代を中心とする複合集落遺跡であることが判明した。室橋遺跡では、その後、南丹市教育委員会・京都府教育委員会の試掘調査などによって、南北約900m、東西約300mの範囲をもつ大規模な集落遺跡であることが明らかとなり、これまで10次にわたる調査が行われている。弥生時代後期～古墳時代初頭、奈良時代～平安時代にかけて、主に灌漑用とみられる大規模な溝が繰り返し掘削されていたことや、古墳時代中期～後期の集落跡、奈良時代後期～平安時代初頭の大形掘立柱建物跡の存在が明らかとなった。また野条遺跡では、過去12次にわたる調査が実施され、弥生時代後期の竪穴式住居跡や、平安時代後期の溝や掘立柱建物跡群が検出された。今回の調査は府営ほ場整備事業に伴うもので、ほ場整備によって、遺構面まで掘削が及ぶ地域と切土による造成が及ぶ部分についてこれまでの周辺における発掘調査の成果と試掘調査の結果を受け、南丹市教育委員会および京都府教育委員会の指導のもとに調査区を設定した。室橋遺跡では、遺跡の北部を中心に６か所を、また南部に１か所の調査区を設定して調査を実施した。一方、野条遺跡の調査は、遺跡の北部においてほ場整備に伴う用水路建設に先立ち、試掘調査を実施したものである。

現地調査は、平成19年４月23日～平成19年９月７日までを調査期間とした。室橋遺跡第11次調査の調査面積は、2000㎡である。また野条遺跡第13次調査の調査面積は200㎡である。発掘調査は、当調査研究センター調査第２課課長肥後弘幸、調査第２課第２係長森正、同次席総括調査員辻本和美、同主査調査員竹井治雄、同調査員高野陽子が担当した。本報告の執筆は、(１)の室橋遺跡第11次報告は、２－ａを高野、２－ｂを辻本が主に担当した。２－ｂの古墳時代の住居につ

第１図　周辺遺跡分布図（国土地理院１/25,000殿田・亀岡）

１.室橋遺跡　２.野条遺跡　３.新庄城跡　４.新庄遺跡　５.船枝遺跡
６.清谷古墳群　７.畑中城跡　８.諸畑遺跡　９.八木田遺跡　10.日置遺跡
11.幡日佐神社　12.如城寺　13.野条城跡　14.池上院　15.筏森山古墳群
16.城谷口古墳群　17.池上遺跡　18.池上古里遺跡　19.刑部城跡　20.多国山古墳群

いては、辻本・高野が分担して執筆し、２－ｃの古墳時代の土器を立命館大学大学院文学研究科（前期）の中居和志が担当した。また、（２）の野条遺跡第13次調査報告については竹井治雄が担当した。その他の部分は辻本・高野の共同執筆による。

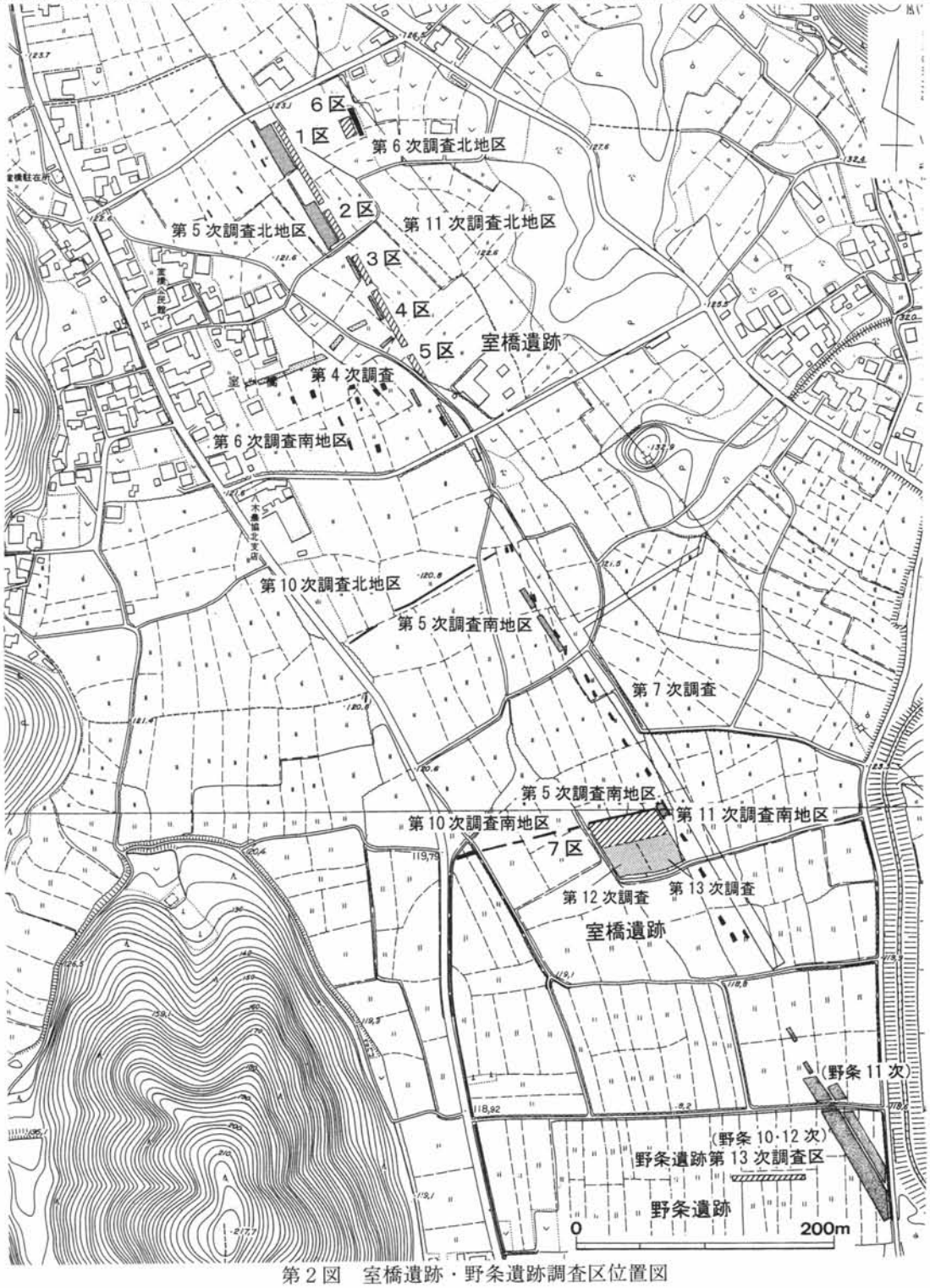
なお、調査に係わる経費は、全額、京都府南丹土地改良事務所が負担した。

調査期間中は、南丹市教育委員会・京都府教育委員会・地元各自治会、室橋地区の方々に多くの御配慮をいただいた。記して、お礼申し上げたい。(注1)

(1)室橋遺跡第11次

1．既往の調査

室橋遺跡は、平成10年度以来、これまで10次にわたる調査が行われている。第1次・2次調査では、府営ほ場整備に伴い旧八木町教育委員会(現南丹市教育委員会)によって北部を中心にした試掘調査が実施され、古墳時代～平安時代を中心とする複合集落遺跡であることが明らかとなっ



第2図　室橋遺跡・野条遺跡調査区位置図

た。その成果を受け、当センターが実施した府営ほ場整備事業に伴う第４次調査では、遺跡北部において古墳時代中期の竪穴式住居跡群や、平安時代の断面Ｖ字形の大溝などを検出した。同じく府道建設に伴い、当第５次調査を実施し、弥生時代後期～古墳時代前期と推定される大溝や、奈良時代の掘立柱建物跡を検出した。また京都府教育委員会による第６次調査では、遺跡範囲の北東部で、奈良時代の掘立柱建物跡群が検出されている。遺跡の南部では、京都府教育委員会による第７次調査や第10次調査で、古墳時代中期の竪穴式住居跡群や平安時代前期の溝、掘立柱建物跡群が確認され、当センターによる第５次調査でも弥生時代中期の溝や古墳時代中期の竪穴式住居跡群、平安時代の掘立柱建物跡を検出した。今回の調査では、北区の調査面積を1100㎡、南区の調査面積を900㎡とし、遺跡北部で７か所の調査区を設け、また南部で１か所の調査区を設けて発掘調査を実施した。

第３図　室橋遺跡北地区調査地配置図

2．調査概要

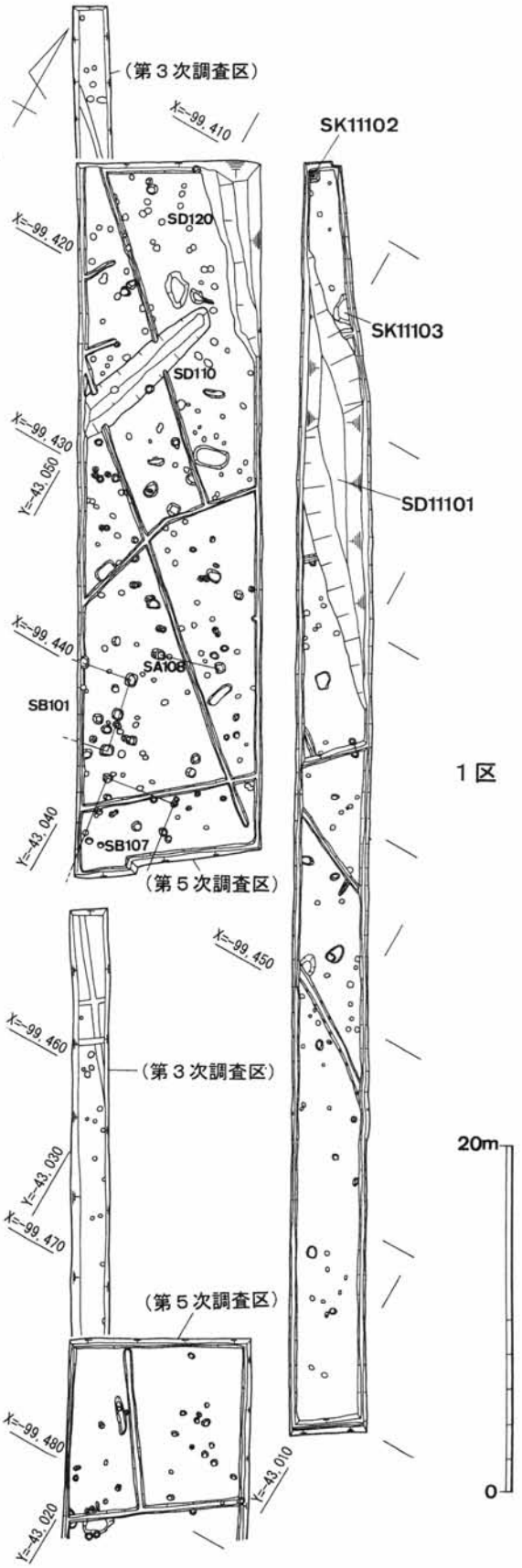
a．北地区の調査

(i)基準層序

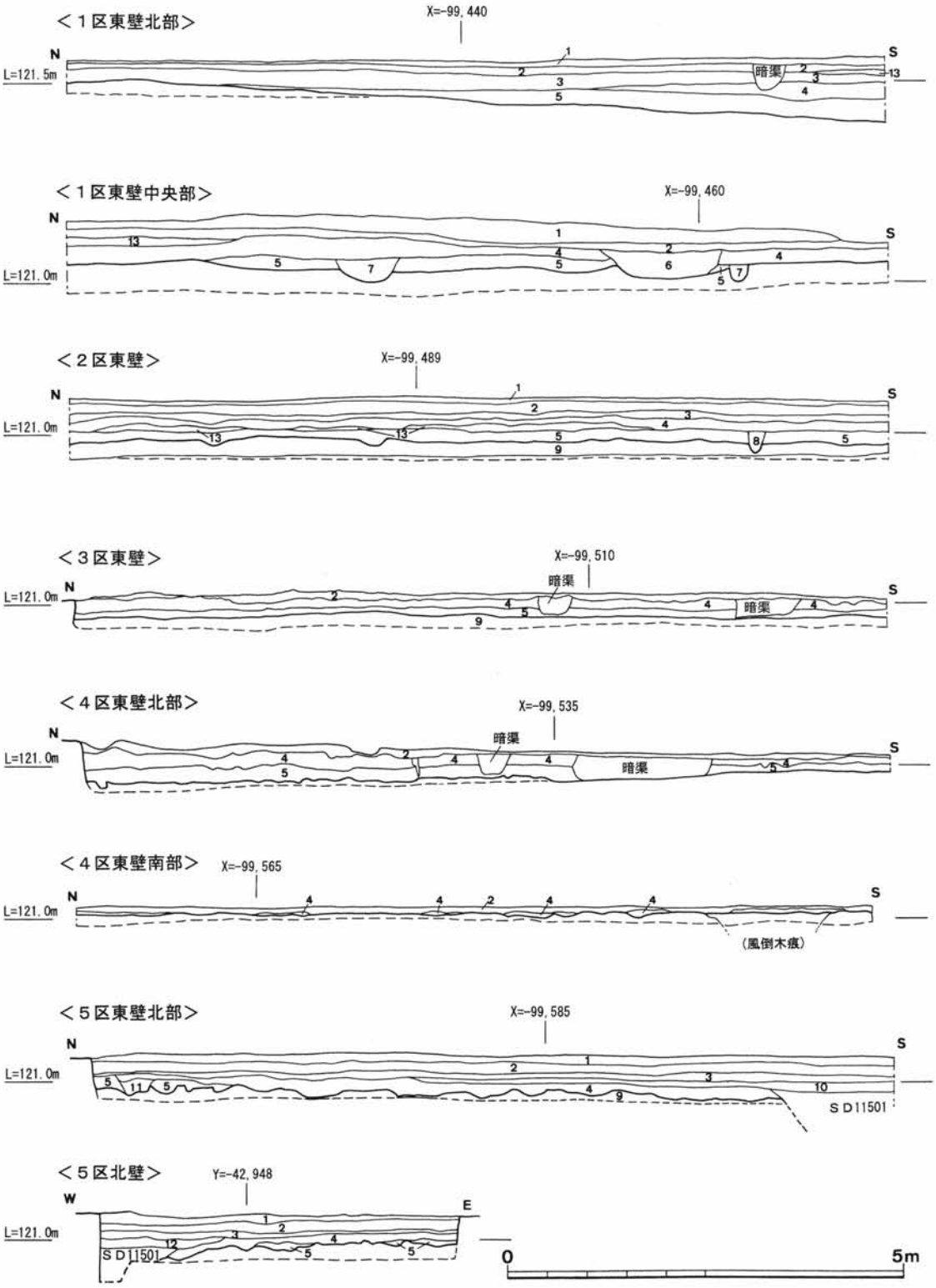
北区における表土の標高は、1区北部で約121.9m、5区南部で約121.4mを測り、調査地周辺は全体として北から南へ向けて低く傾斜する。調査対象地は調査前には耕作地であり、一帯が平坦な地形となっているが、かつては多小の起伏を伴った地形であったとみられ、ベース面の標高は4地区北部が最も高い。層序は、1区・2区では耕作土および床土を除去すると、上層から近世遺物を包含する灰色粘質土(第5図2層)、鉄分を多く含有する暗褐色粘質土(同3層)、古代～中世遺物を包含する黒褐色粘質土(同4・5層)の順に堆積する。黒褐色粘質土は、いわゆる丹波黒ボク層の再堆積層とみられる。遺構面は、1区北部では、耕作土床土直下の標高約121.7mのレベルで、2区南部では標高約121.1m前後のレベルで、黒褐色粘質土の下層中において検出した。またベース層は黄灰褐色粘質土層が各地点でみられたが、1区南部・2区北部ではこの層位が下がり、暗黄灰褐色粘質土層を検出した(第5図9層)。1区南部では上層掘削中に縄文時代前期とみられる石鏃が出土したため、重機によってこの層位を面的に広げ、その下層の黄灰褐色粘質土層まで掘削し精査を行ったが、遺構・遺物ともに認められなかった。

(ii)1区の調査

北区のうち、1～5区はほ場整備用地内の用水路建設予定地で実施したもので、南北約250mにわたって幅約4.5mの細長い調査区を設定した。このうち1区では280m²を調査した。検出遺構は、北部で弥生時代と推定される大規模な溝1条を検出した。また時期は明確ではない

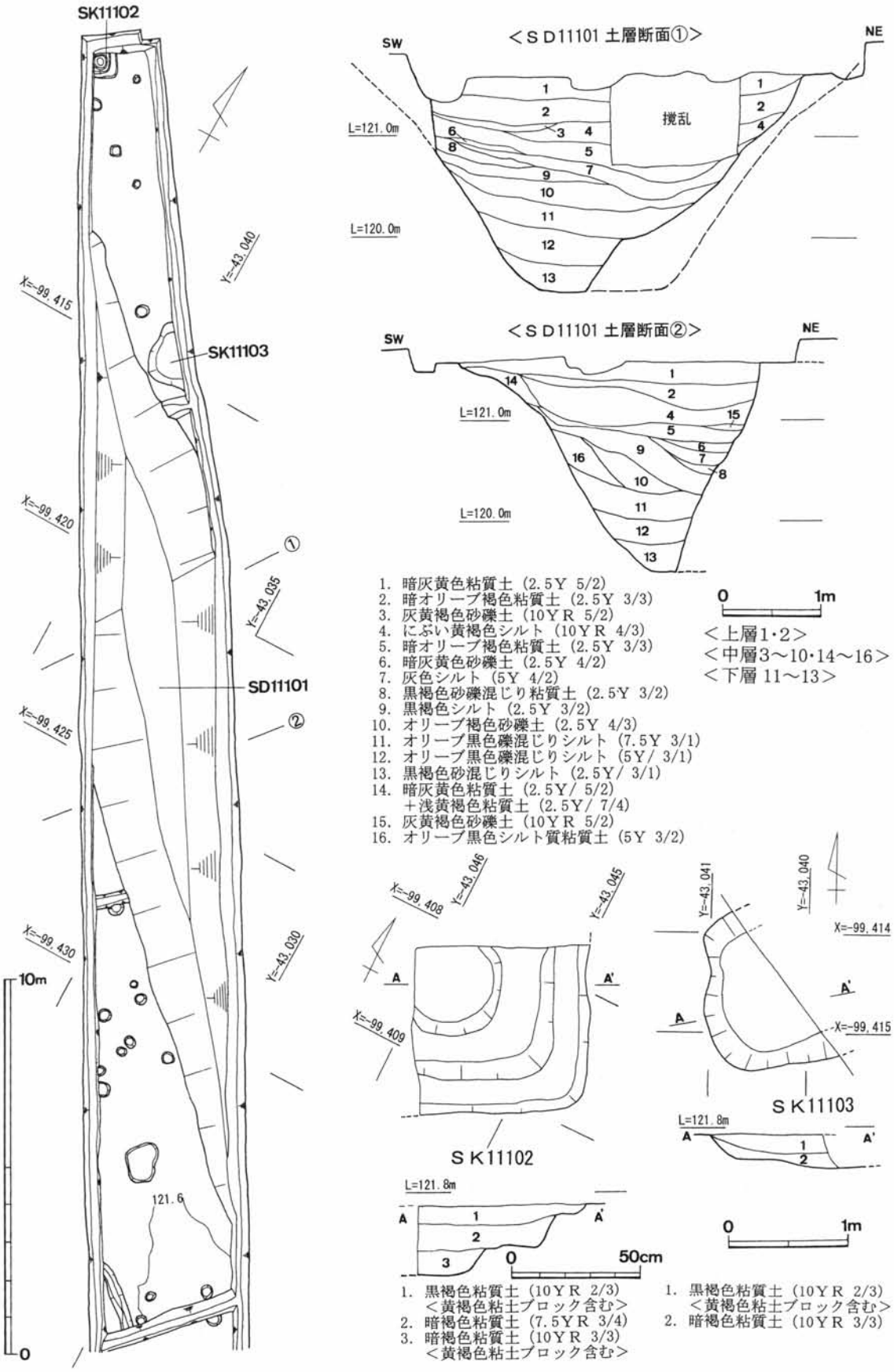


第4図　1区遺構配置図



1. 浅黄色粘質土（2.5Y 7/4）＜耕作土床土＞
2. 灰色粘質土（5Y 6/1）
3. 暗褐色粘質土（10YR 3/3）＜鉄分多く含む＞
4. 黒褐色粘質土（10YR 3/2）
5. 黒褐色粘質土（2.5Y 3/2）
6. 灰オリーブ砂礫混じり粘質土（5Y 5/3）
   ＜φ2～10cm 砂礫多く含む＞
7. 暗褐色粘質土（10YR 3/3）
8. 黒褐色粘質土（2.5Y 3/1）
9. 暗オリーブ褐色粘質土（2.5Y 3/3）
10. 灰黄褐色粘質土（10YR 4/2）
11. 黒褐色礫混じり粘質土（2.5Y 3/1）
12. 暗オリーブ褐色粘質土（2.5Y 3/3）
13. 暗灰黄色粘質土（2.5Y 5/2）

第５図　北地区各調査区土層断面図



第６図　溝ＳＤ11101実測図・同土層断面図・土坑ＳＫ11102・11103実測図

が、土坑または土坑状の落ち込み４基と、中央部から南部にかけて柱穴群を検出した。柱穴群のなかには須恵器片を出土したものがあり（第４図Ｐ11104）、奈良時代～平安時代の柱穴を含むとみられるが、建物あるいは柵列として復原できるものはみとめられない。

溝ＳＤ11101（第４・５図）　調査区北端で検出した溝である。北西から南東に向け掘削されている。部分的な検出にとどまり、溝幅全体を確認することはできないが、検出面での溝幅は最大約４ｍを測るが、溝幅が完全に確認できる部分はなく、復原するとおおよそ約５～６ｍの規模をもつ大規模な溝になるとみられる。溝の断面形は、台形状をなす。溝内からは、溝は大きく３層に分かれ、下層から順にシルト性の堆積層（第６図11～13層）、中層にシルト層と砂礫層の互層（同３～10層）、上層に粘質土層が堆積するが、中層と上層との間には不整合面が形成され、中層上面は流失しているとみられる。上層から奈良時代の遺物が出土しているが、これらは溝の埋没後の落ち込みに堆積したものである。溝の堆積環境は、下層はシルト性の堆積であることから、滞水した状況がうかがえるが、中層では洪水砂とみられる砂礫層との互層となり、堆積層の流失を繰り返していたとみられる。下層から遺物は出土していないが、溝の北西延長部を調査した第５次調査で弥生時代後期後葉～古墳時代初頭とみられる土器が出土している。[注2] なお、今回の調査で実施した溝下層の堆積土のサンプル（２点）による加速器放射性炭素年代測定では、弥生時代中期の年代観が示されている。[注3]

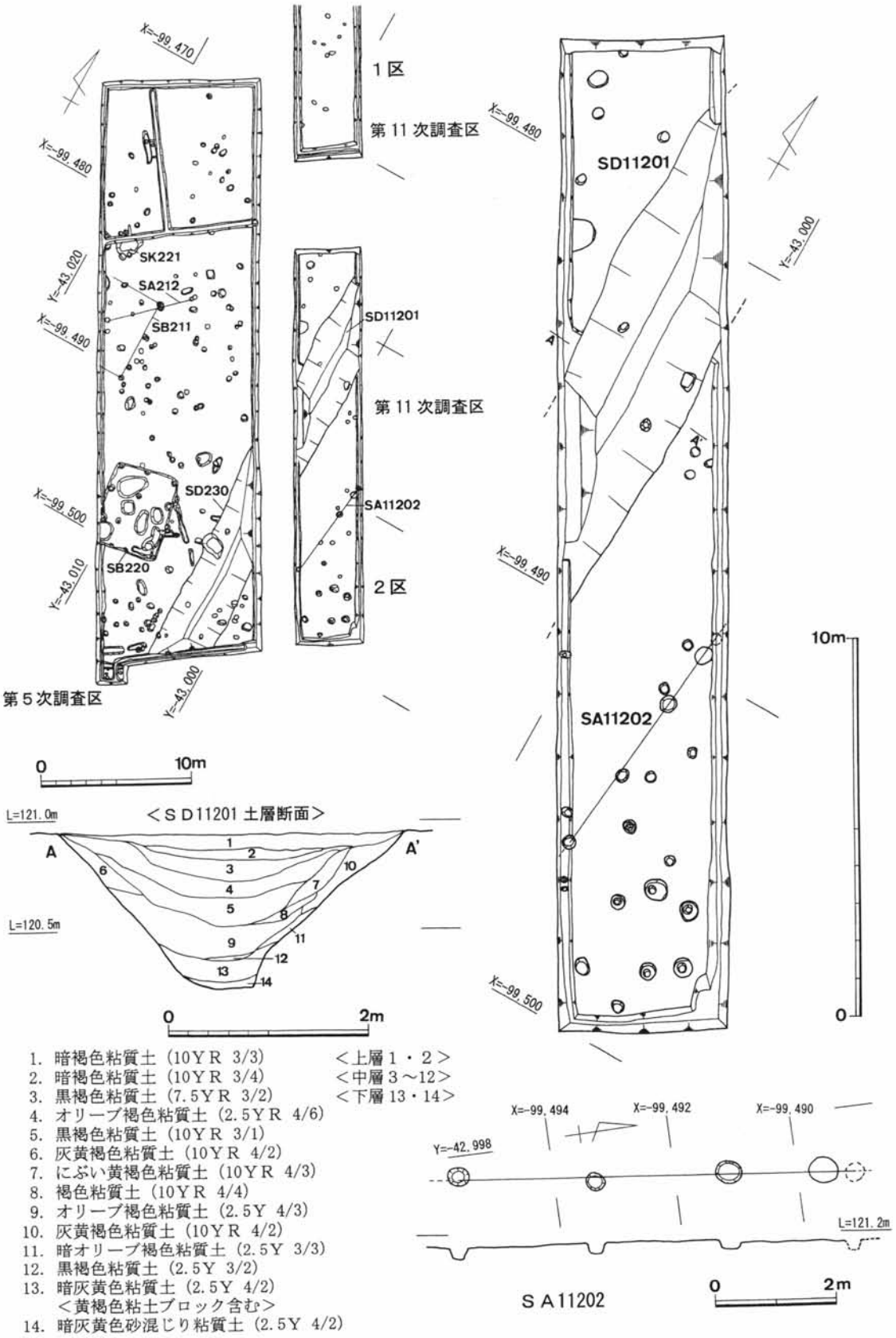
土坑ＳＫ11102（第６図）　１区北端で検出した方形の土坑である。断面は、３段の掘形をもつ。残存長は約1.4ｍを測るが、おおよそ一辺約２ｍに復原できる。深さは、約0.5ｍを測る。遺物は出土していないが、埋土の状況から奈良～平安時代の建物跡と推定される。

土坑ＳＫ11103（第６図）　溝ＳＤ11101の北側で一部を検出した。平面形は、歪な方形を呈する。残存長1.5ｍ、推定復原長約1.7ｍ、深さ0.6ｍ測る。遺物は出土していないが、埋土に黄褐色粘土の小塊を多く含み、奈良～平安時代にかけての土坑とみられる。

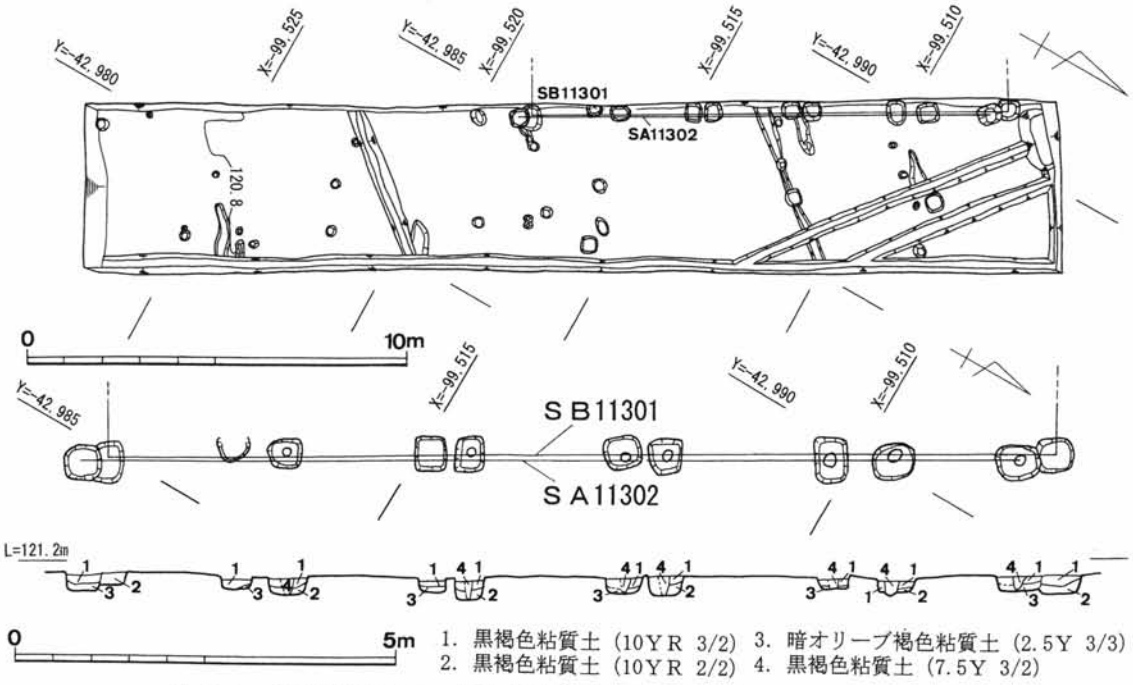
（iii）２区の調査

２区では、115㎡を調査し、溝１条や柱列１基、柱穴群などを検出した。

溝ＳＤ11201（第７図）　北部で検出した溝である。北から南へ向けて直線的に掘削された大規模な溝である。検出面での溝幅は、約3.5ｍを測る。断面はＶ字形をなすが、溝底部は幅約0.3ｍの平坦面を形成している。深さは、約1.5ｍを測る。埋土の堆積状況は、大きく４層に分けられる。最下層には、ベース層の黄褐色粘土をブロック状に含む暗灰黄色粘質土が堆積する。下層のオリーブ褐色粘質土との間には黒褐色粘質土をブラックバンド状に含み、このレベルは再掘削された溝底部の可能性がある。中層はシルト性の堆積がみられ、滞水する環境にあったとみられる。溝内から遺物は出土していないが、溝の南延長部を調査した第５次調査では、上層から古墳時代前期の布留式古相を示す甕が出土し、最終的な埋没の段階と推定される。１区のＳＤ11101とは近い規模をもつが、溝の断面形や土層の堆積状況が異なり、同一の溝と判断する資料は得られていない。今回の調査では、堆積土の下層のサンプル１点を用いて、加速器放射性炭素年代測定を実施した。[注4]



第７図　２区遺構配置図・溝ＳＤ11201土層断面図



第８図　３区遺構配置図・掘立柱建物跡ＳＢ11301・柱列ＳＡ11302実測図

柵列ＳＡ11202（第７図）　南部で検出した南北方向の柵列である。柱間の距離は約1.8～2.2mを測り、主軸はＮ６°Ｅをとる。埋土の状況や、主軸が第５次調査で検出された奈良時代の建物跡や柱列と同様の南北方向であることから、同時期に帰属する可能性が高い。

（iv）３区の調査

３区は110㎡を調査し、掘立柱建物跡１棟と柱列１基を検出した。

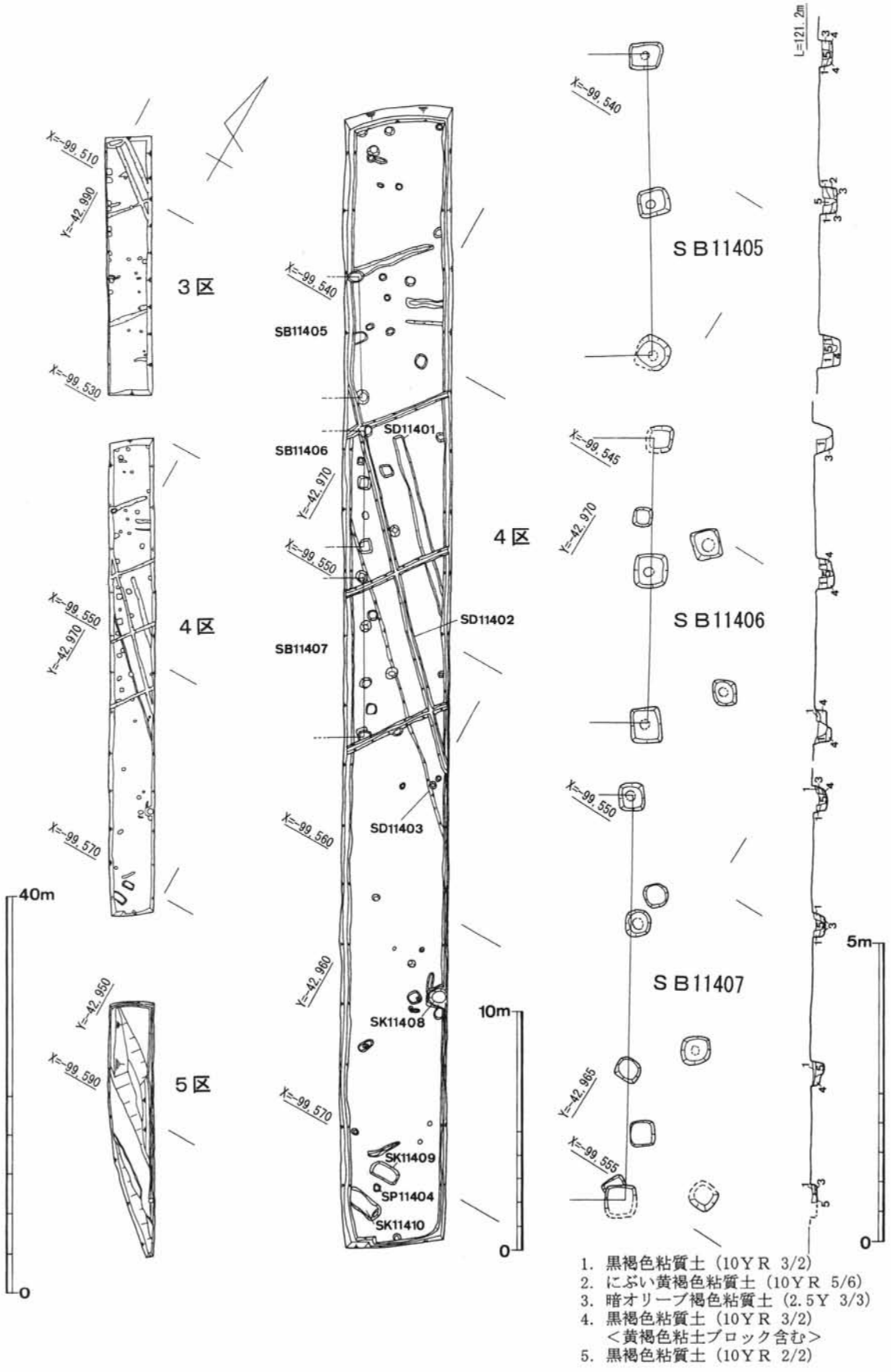
掘立柱建物跡ＳＢ11301（第８図）　調査区西壁に沿って検出した柱列である。５間以上の規模をもち、柱穴の規模は約0.4～0.5mを測る。主軸はN31°Ｗをとる。平成19年度内の第15次調査で西側に対応する柱穴が検出され、掘立柱建物跡の東側桁行の柱列を構成するとみられる。柱穴形態や埋土から奈良時代～平安時代初頭の柱穴群と推定される。

柱列ＳＡ11302（第８図）　ＳＢ11301と一部重複して検出した。５間以上の規模をもち、主軸はN32°Ｗをとる。ＳＢ11301よりも全体に約0.2m南東に位置し、その掘形を削平して掘削される。第15次調査では対応する柱列はみられず、東側に展開する建物跡の一部を構成する可能性がある。

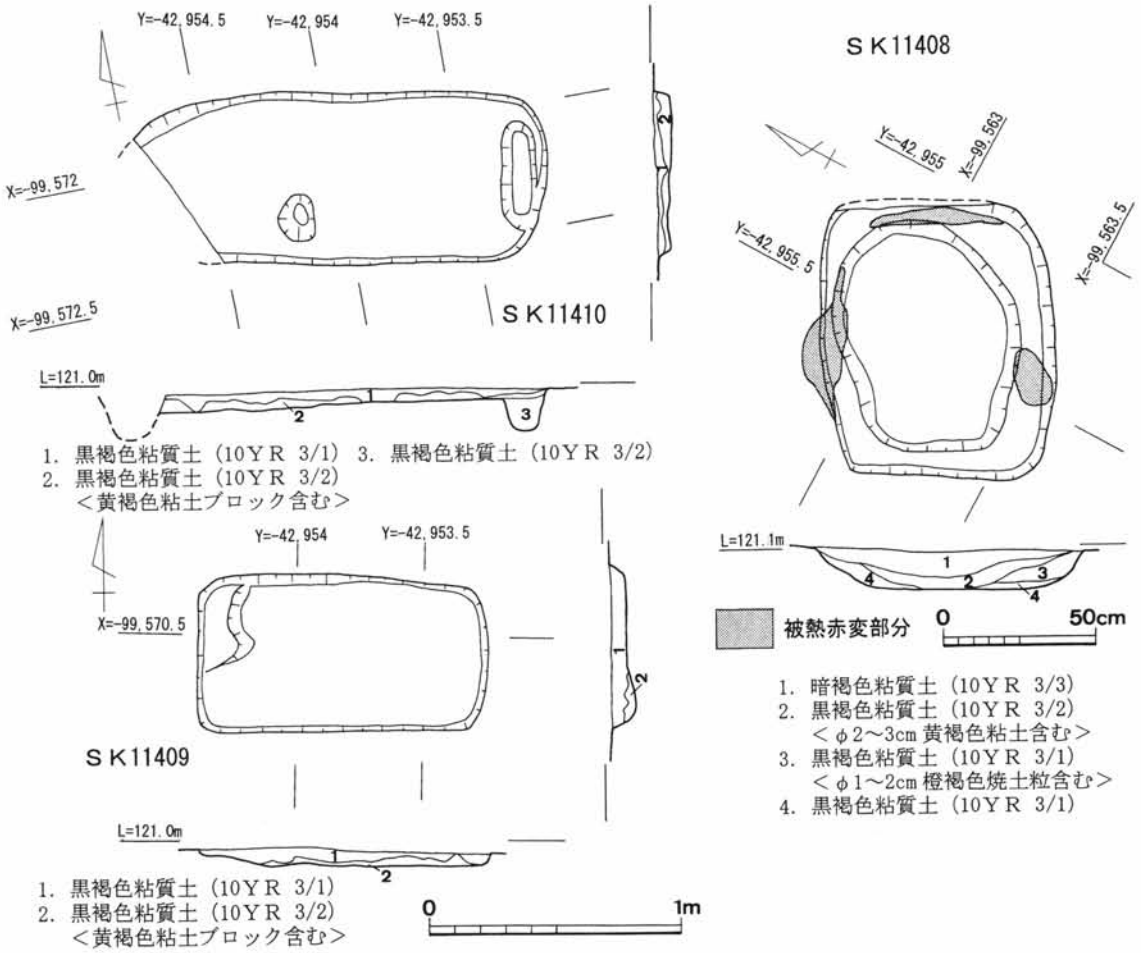
（v）４区の調査

４区は205㎡を調査し、掘立柱建物跡３棟、土壙２基、土坑１基、素掘り溝３条等を検出した。南半部は耕作土直下で遺構面を検出し、遺構面上層は大きく削平されている。４区の西側壁寄りでは方形掘形をもつ柱穴群を検出したが、第15次調査から３棟の掘立柱建物跡の一部を構成することが判明した。(注5)

掘立柱建物跡ＳＢ11405（第９図）　ＳＢ11405は、北西部で検出した建物跡である。２間（約5.5m）の規模をもち、主軸はN32°Ｗをとる。柱穴の一辺は約0.5～0.6mを測る。第15次調査により、２間×５間以上の東西棟の東の梁間を構成することが確認された。出土土器から奈良時代後



第９図　４区遺構配置図・掘立柱建物跡ＳＢ11405・11406・11407実測図



第10図　土壙ＳＫ11409・11410・土坑ＳＫ11408実測図

期～平安時代初頭の建物跡とみられる。

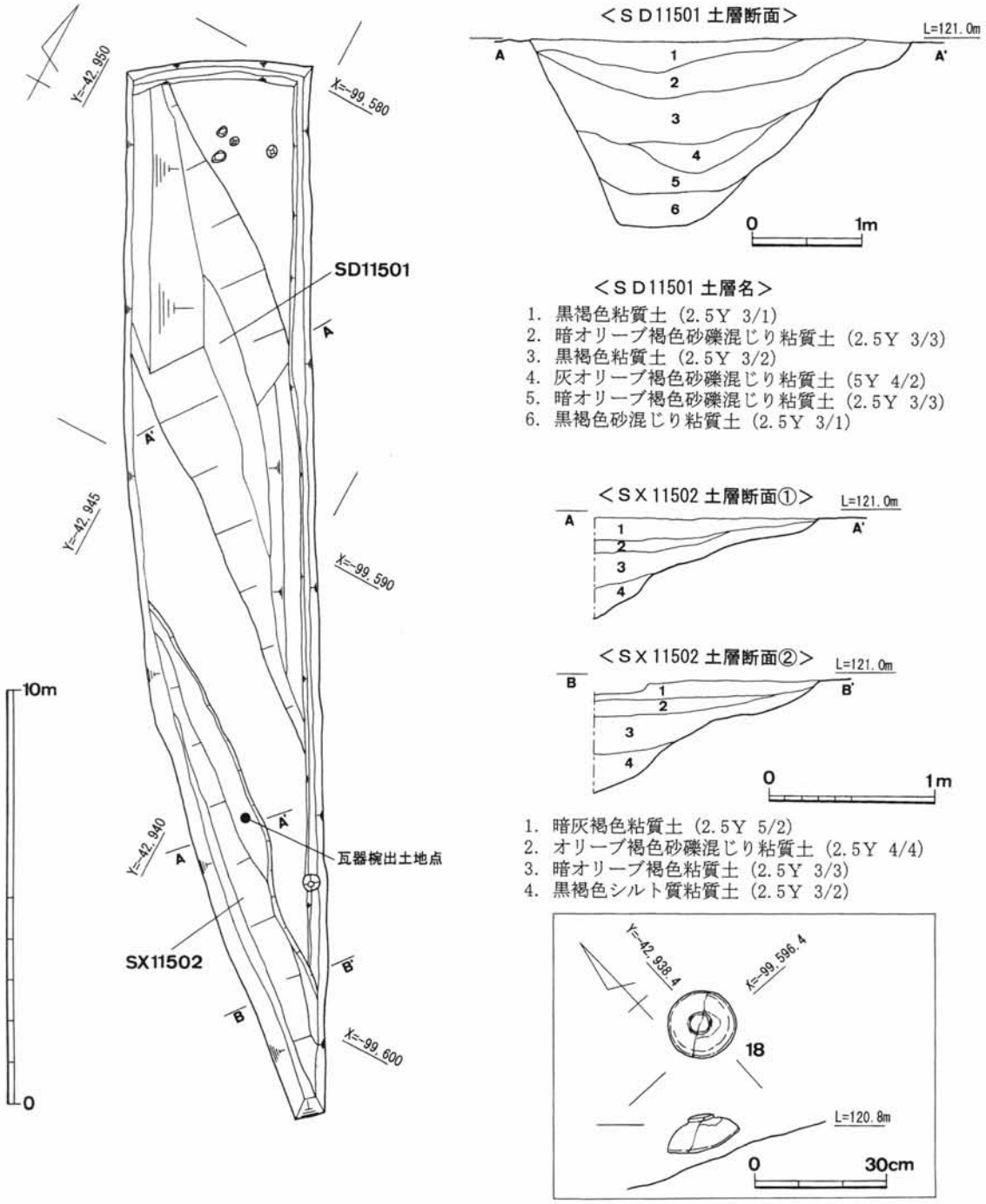
掘立柱建物跡ＳＢ11406（第９図）　ＳＢ11405の南東で検出した建物跡である。規模約5.4mを測る２間分の柱列を検出した。主軸は、N32°Wをとる。第15次調査から、２間×６間以上の東西棟の東の梁間を構成することが判明している。

掘立柱建物跡ＳＢ11407（第９図）　調査区中央西側で検出した。規模約7.4mを測る３間の柱列である。第15次調査から、３間×１間の南北棟の東側桁行を構成する柱列とみられる。遺物は出土していないが、検出状況からＳＢ11405・ＳＢ11406と同様の時期の建物跡と推定される。

土壙ＳＫ11410（第10図）　南東端で検出した方形の土壙である。北西部の一部は調査範囲外にあるが、検出面での長さ約1.7m、幅0.7m、深さ約0.1mを測る。主軸はN81°Wをとる。床面の南東の小口側に深さ約0.15mの小土坑をもつ。遺物は出土していないが、小土坑は造り付けの棺の仕切り板の痕跡とみられることから、弥生時代の墓壙と推定される。

土壙ＳＫ11409（第10図）　長さ2.2m、幅0.6m、深さ0.1mを測る方形土壙である。ＳＫ11410と隣接し主軸を合わせることからほぼ同時期の遺構とみられ、弥生時代の墓壙と推定される。

土坑ＳＫ11408（第10図）　南東部で検出した方形の土坑である。検出面での規模はおおよそ0.8×0.85m、深さ0.1mを測る。土坑の肩部に被熱し赤変した部分を数か所確認した。遺物は出土していないため、埋土に含まれる炭化物の加測器放射性炭素年代測定を実施した。(注6)



第11図　５区遺構配置図・溝ＳＤ11501土層断面図

溝ＳＤ11401（第９図）　調査区中央で、北西から南東に斜行して掘削された素掘り溝である。幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。埋土から近世以降の溝と判断される。

(vi) ５区の調査

５区は85m²を調査し、溝１条、溝状の落ち込み１基を検出した。

溝ＳＤ11501（第11図）　北西から南西に向けて掘削された溝である。規模は、幅3.4m、深さ1.7mを測る。断面形は、台形状をなし、溝底は約0.6mの平坦面を形成する。各層に細砂礫を多量に含み、流路と考えられることから、灌漑用水としての性格をもつ溝とみられる。出土土器か

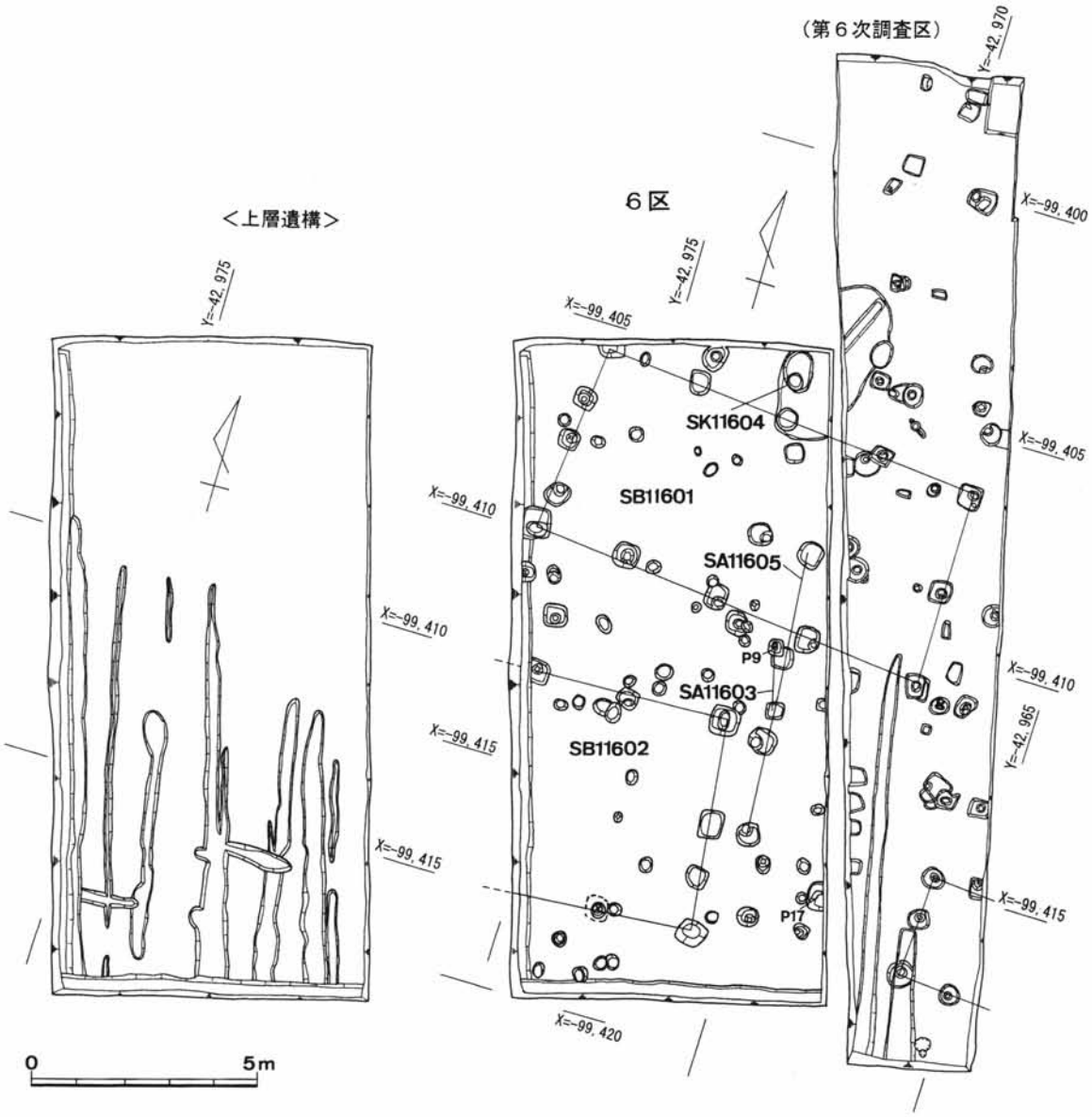
ら、時期はおおよそ奈良時代後葉～平安時代初頭と推定される。

落ち込みＳＸ11502(第11図)　南東端で検出した溝状の落ち込みである。南西部は調査範囲外にあたり立ち上がりは確認できないが、溝の南東側の一部と推定される。出土遺物はわずかながら上層(ＳＤ11502－２層)から瓦器椀１点が出土し、下層(ＳＤ11502－４層)から須恵器底部片が出土した。10～11世紀に掘削された溝を、12世紀中頃に再掘削した可能性がある。なお、この２層については土壌に含まれる炭化物の加速器放射性炭素年代分析を実施した。(注7)

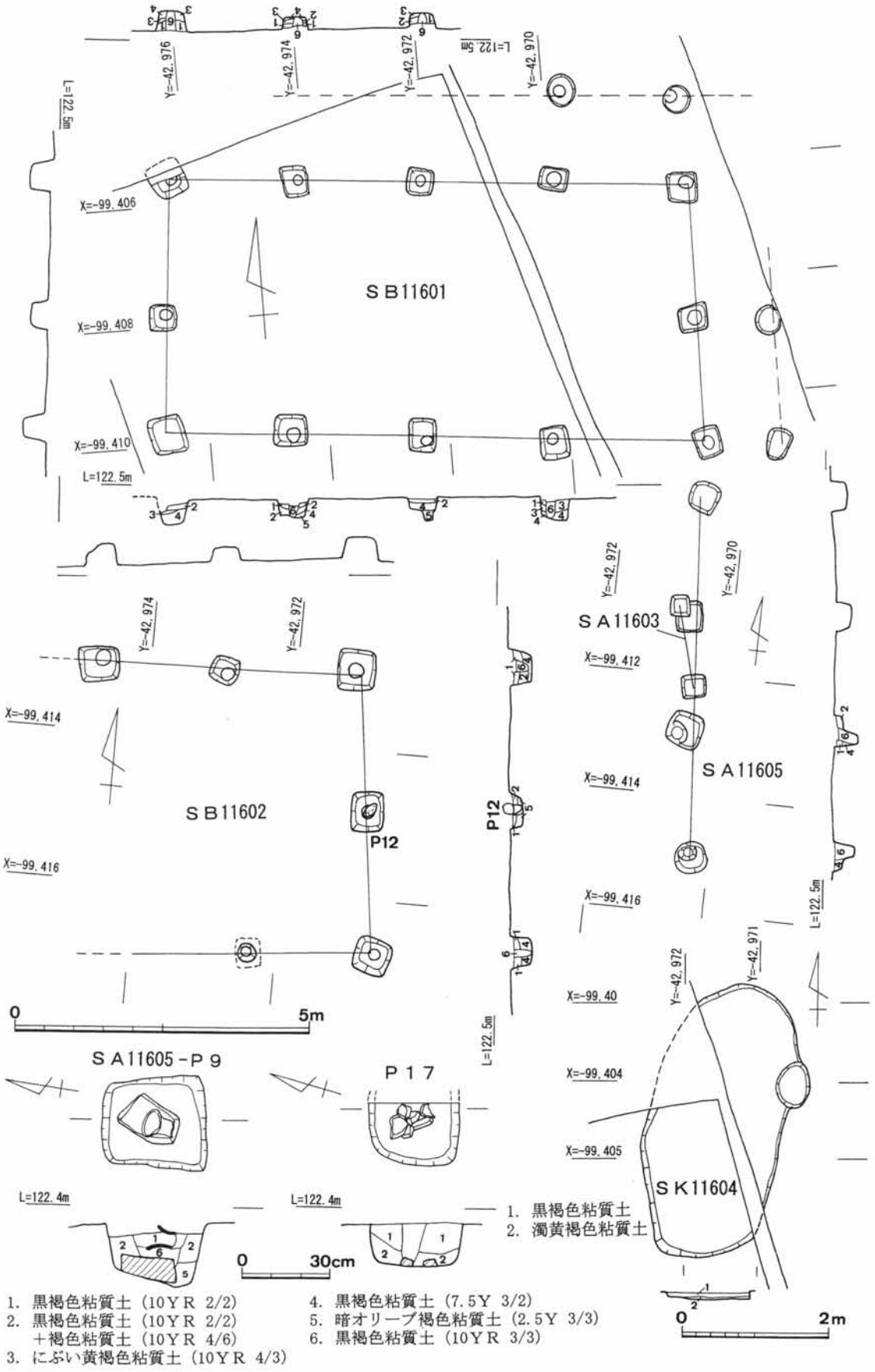
(vii) ６区の調査

６区は105㎡を調査し、掘立柱建物跡２棟、柱列２基、土坑１基、近世以降とみられる素掘り溝群を検出した。この周辺は微高地で、遺構面は、耕作土床土除去後、近世耕作面とみられる灰色粘質土層(厚さ約0.2m)直下の標高約122.2mで検出した。

掘立柱建物跡ＳＢ11601(第13図)　調査区北部で検出した建物跡である。桁行３間以上、梁間



第12図　６区遺構配置図



第13図　掘立柱建物跡ＳＢ11601・11602・柱列ＳＡ11603・11605・土坑ＳＫ11604実測図

２間を検出したが、平成18年度の第６次調査[注8]で連続する柱列が確認されており、桁行４間(約9.7m)、梁間２間(約4.8m)の東西棟の建物跡として復原できる。さらに、東と北に平行して柱列が認められることから、庇付建物となる可能性がある。主軸は、Ｎ６°Ｅをとる。柱穴の検出状況から奈良時代後半～平安時代前期の建物跡と推定される。

掘立柱建物跡ＳＢ11602(第13図)　調査区中央部で検出した建物跡である。桁行２間(約5.0m)以上、梁間２間(約5.5m)の東西棟として復原できる。建物の主軸はＮ６°Ｗをとる。

柱列ＳＡ11605(第12図)　ＳＢ11602の東で検出した柱列である。一辺約0.5mの方形の柱穴から構成される３間以上の柱列である。主軸は、Ｎ６°Ｗをとる。さらに北にのび、第６次調査区の柱穴に連続する可能性がある。その場合は６間以上の規模が復原できる。

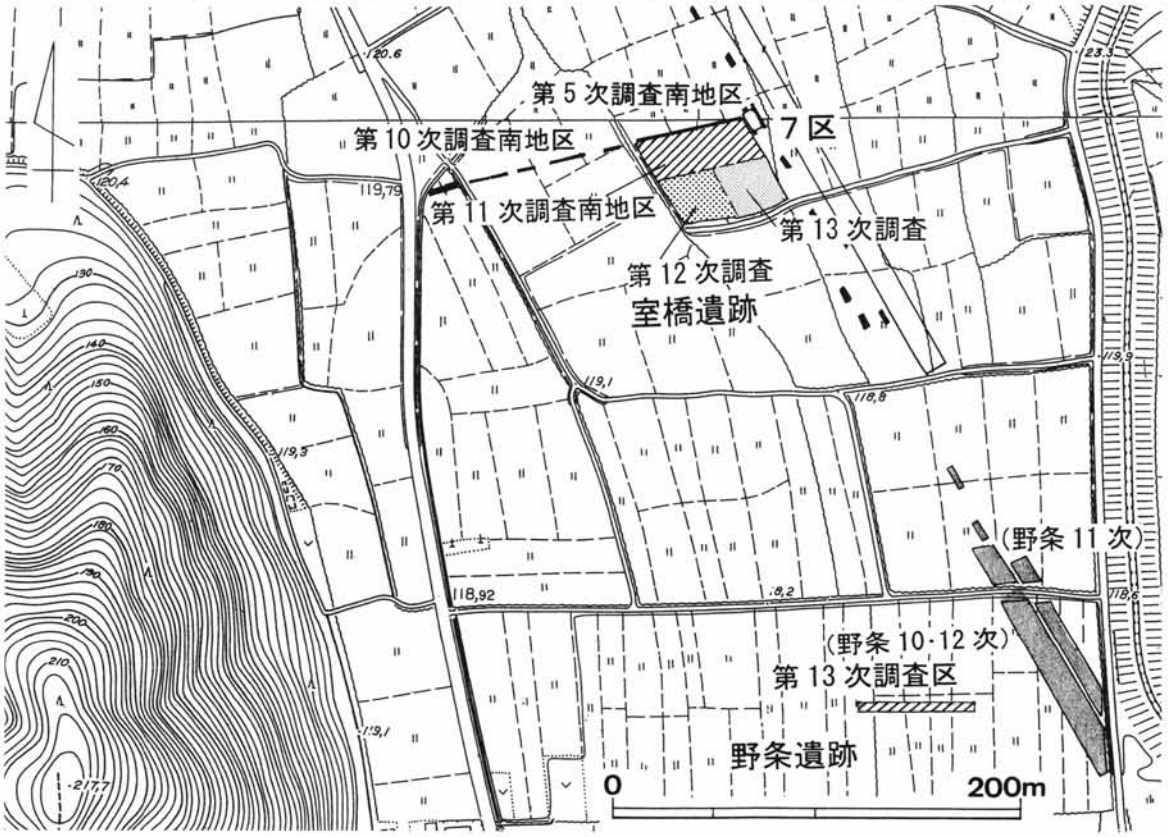
柱列ＳＡ11603(第12図)　ＳＡ11602と一部重複して検出した。一辺約0.3mの方形の小形柱穴からなる１間の柱列である。柱間は、約1.4mを測り、主軸はＮ12°Ｗをとる。北側の柱穴(Ｐ９)から須恵器壺口頸部が出土し、時期は奈良時代末～平安時代前期前葉と推定される。

土坑ＳＫ11604(第13図)　北東隅で一部を検出した楕円形状の土坑である。第６次調査区でも検出され、長さ約3.7m、幅約1.8m、深さ約0.1mを測る。遺物は確認していないが、柱穴群を切り込んで掘削されることから、建物の廃絶後の土坑であることが判明した。

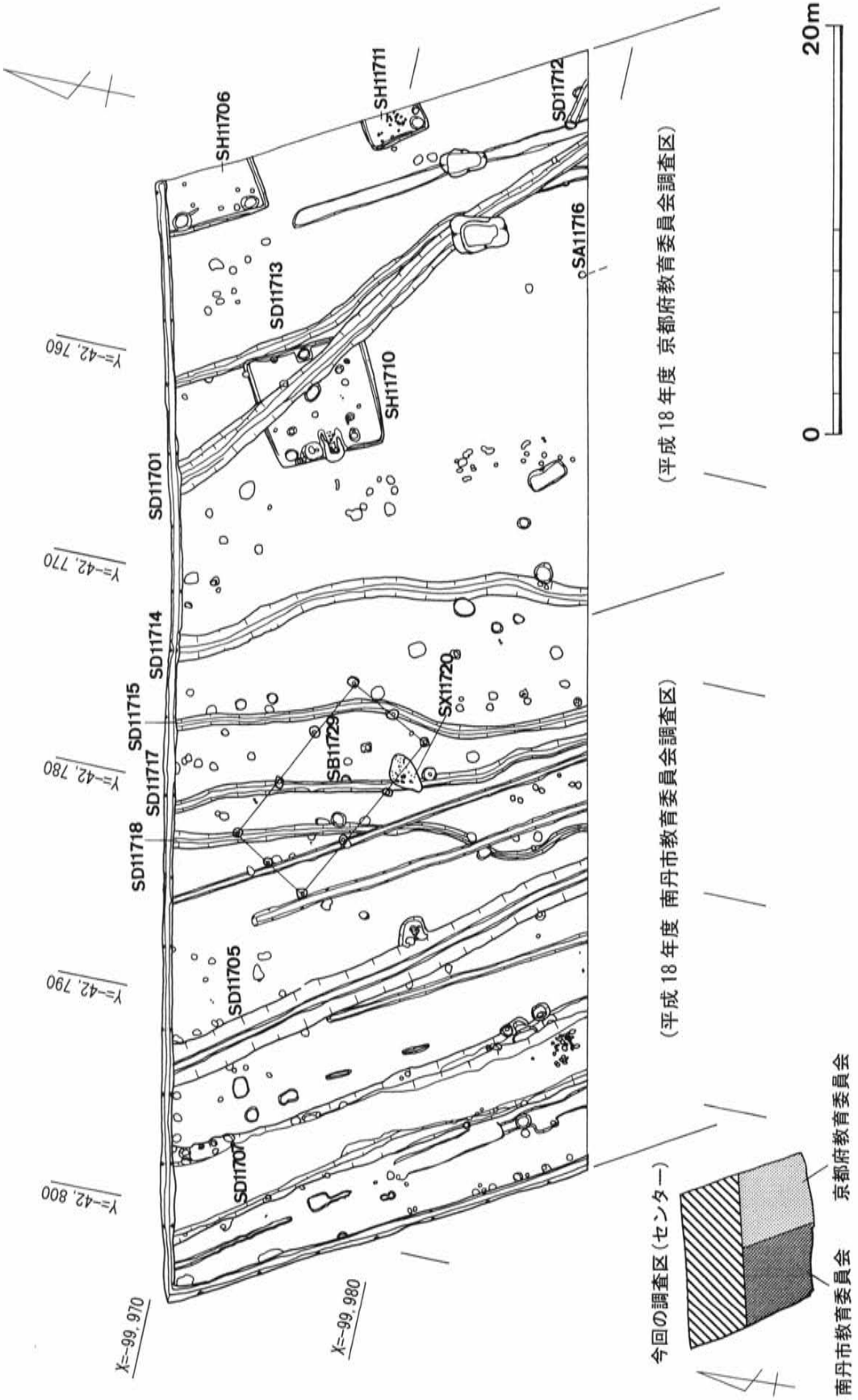
ｂ．南地区の調査

７区の調査

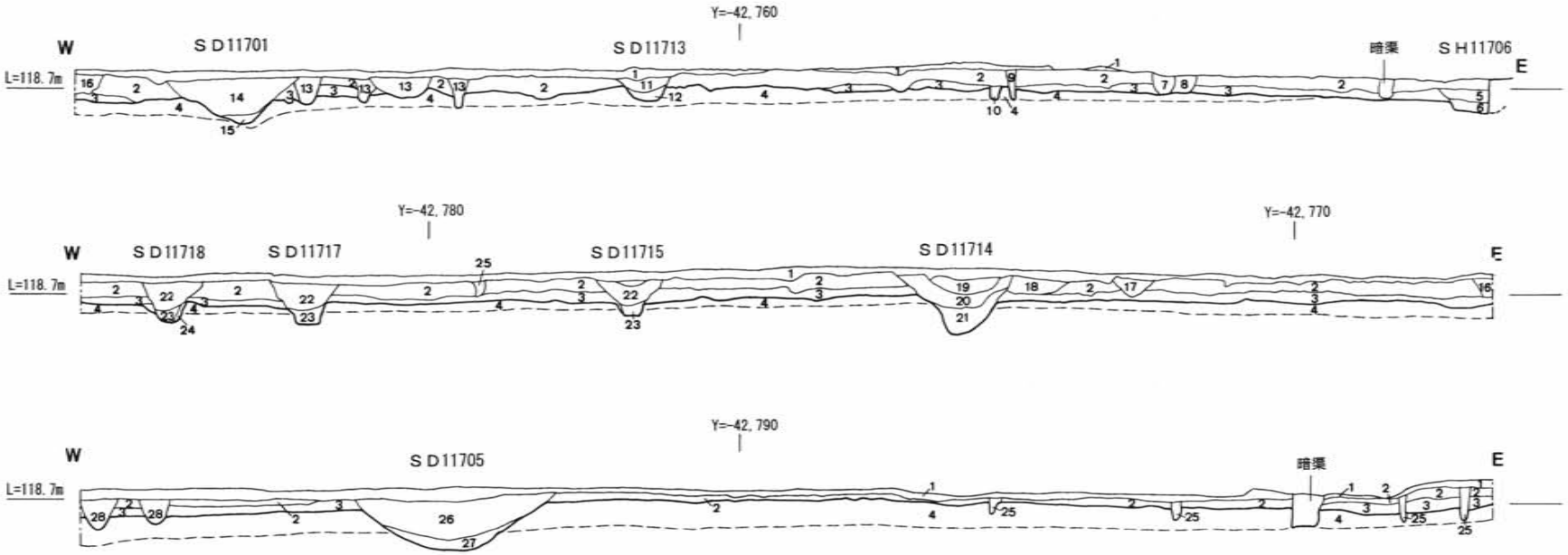
今回の調査対象地では最も南に位置する地区で、室橋遺跡の遺跡想定範囲のほぼ南限に位置す



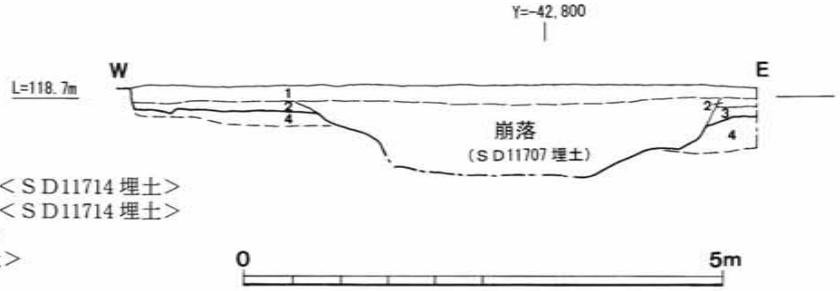
第14図　室橋遺跡南地区・野条遺跡調査区位置図



第15図　7区遺構配置図



1. 黄褐色粘質土（2.5Y 5/4）＜水田床土＞
2. 黒褐色粘質土（10YR 3/1）＜黒ボク層＞
3. 黒褐色粘質土（10YR 3/2）＜黒ボク漸移層＞
4. 明黄褐色粘質土（10YR 6/8）＜ベース層＞
5. 黒褐色粘質土（10YR 3/1）＜SH11706 埋土＞
6. 黒色粘質土（7.5YR 2/1）＜SH11706 埋土＞
7. 暗褐色粘質土（7.5YR 3/3）
8. 暗褐色粘質土（7.5YR 3/1）
9. 灰褐色粘質土（10YR 4/2）
10. 茶褐色粘質土（10YR 4/3）
11. 黒色粘質土（7.5YR 2/1）＜SD11713 埋土＞
12. 黄褐色混じり黒褐色粘質土（10YR 3/3）＜SD11713 埋土＞
13. 暗褐色粘質土（2.5Y 3/2）
14. 暗褐色粘質土（10YR 3/3）＜SD11701 埋土＞
15. 黒褐色粘質土（10YR 2/1）＜SD11701 埋土＞
16. 灰色粘質土（5Y 5/1）
17. 黒褐色粘質土（7.5YR 3/2）
18. 黒色粘質土（7.5YR 1/2）
19. 黒褐色粘質土（7.5YR 3/2）
20. 暗褐色粘質土（7.5YR 3/3）＜SD11714 埋土＞
21. 黒褐色粘質土（7.5YR 3/2）＜SD11714 埋土＞
22. 黒色粘質土＜SD11715 埋土＞
23. 黒褐色粘質土＜SD11715 埋土＞
24. 褐色粘質土（7.5YR 3/3）
25. 黒色粘質土（7.5YR 2/1）
26. 黒褐色粘質土（7.5YR 3/2）＜SD11705 埋土＞
27. 褐灰色砂礫（10YR 5/1）＜SD11705 埋土＞
28. 黒褐色粘質土（7.5YR 3/2）



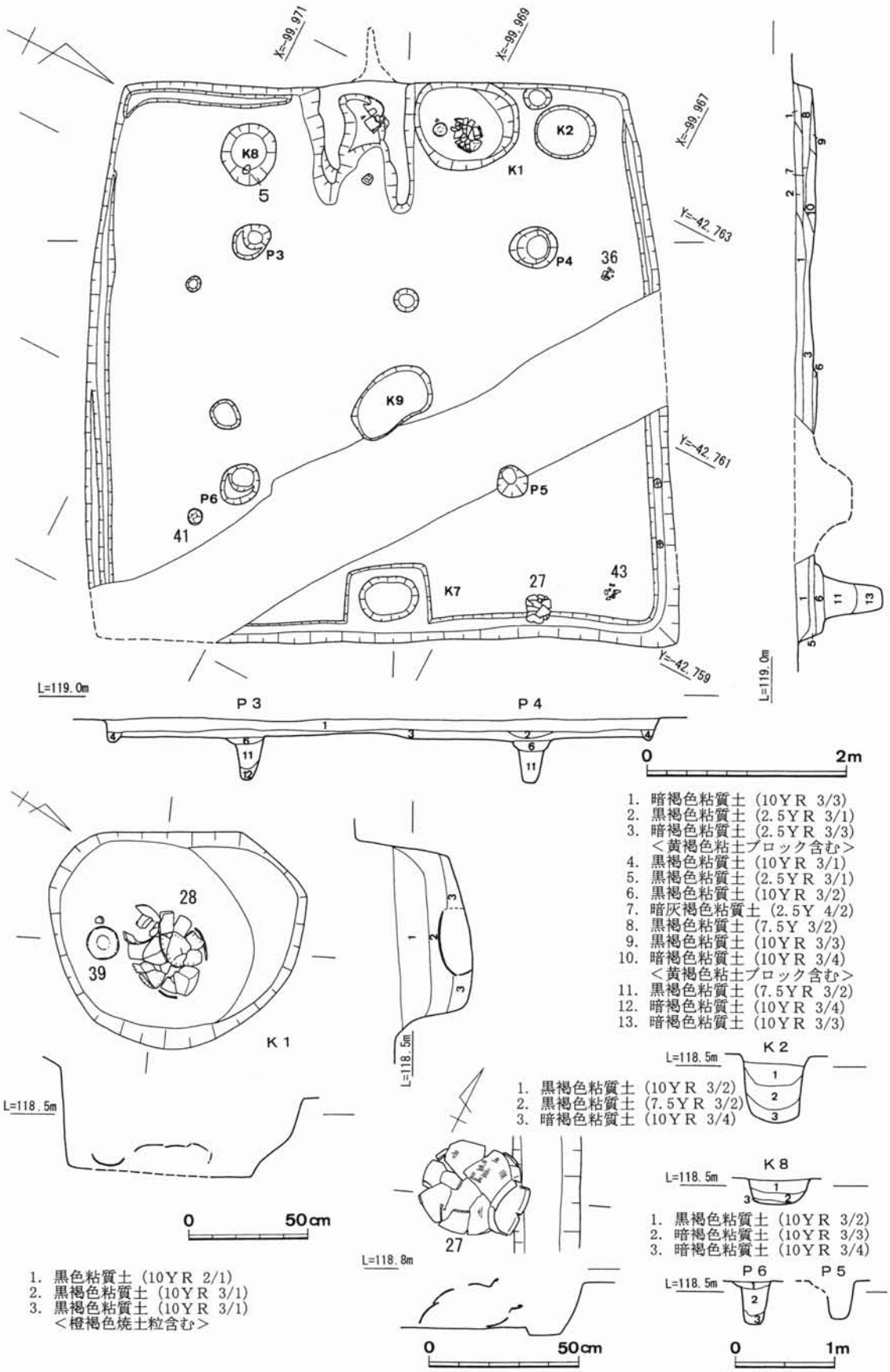
第16図　7区土層断面図

る。調査地全体の合計面積は2,100㎡である。今回、当調査研究センターとしては第11次調査第７地区として、このうち北側部分の1,100㎡を対象に調査を実施した。なお、当調査地は、南側地区の西側部分を南丹市教育委員会(第12次調査、500㎡)が、同じく東側部分を京都府教育委員会(第13次調査、500㎡)がそれぞれ分担して調査を実施した。

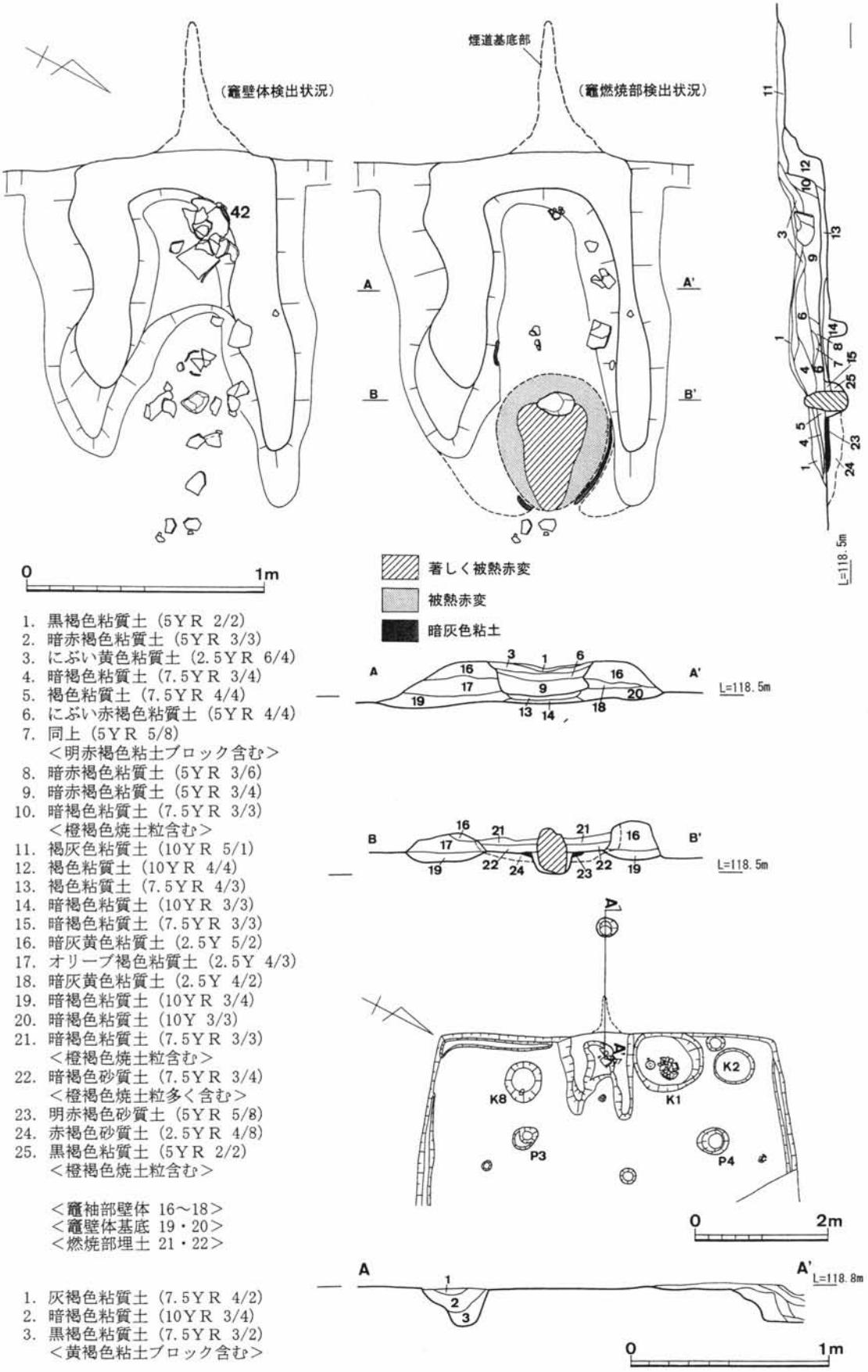
７区では、現地表面は北部で標高約119.0mを測り、北西から南東へ緩やかに傾斜する地形にある。遺構面は、耕作土床土(黄褐色粘質土)直下の黒褐色粘質土層中において、標高約118.7mのレベルで検出した。調査の結果、ほぼ北西から南東方向にのびる溝９条のほか、調査区の東部を中心に合計３基の竪穴式住居跡を検出した。このほか掘立柱建物跡１棟、柵列１条、土器溜まり１基のほか多数の土坑・ピットを検出した。

竪穴式住居跡ＳＨ11710(第17図)　調査区東部で検出した方形の竪穴式住居跡である。住居床面は、ＳＤ11701によって中央部が削平されている。住居の規模は、約5.9m×5.5m、深さ約0.2mを測る。主軸は、N30°Wをとる。主柱穴は４基(Ｐ３・４・５・６)からなり、対角線上に配される。主柱穴の規模は、径約0.3～0.4m、深さ約0.4mを測る。床面には、周壁に沿って、幅約0.15m、深さ約５㎝の排水溝が掘削されている。床面直上から遺物が出土し、貼床は認められない。住居南西辺の中央で、造り付け竈を検出した。竈は、淡黄灰褐色粘土によって壁体を構築し、袖部を住居壁に直接取り付ける構造である(第18図)。全長約1.5m、幅約1.1mを測る。燃焼部は著しく赤変し、その中央部に石製の支脚が据えられている。構造上、特に注目されるのは、袖部長と掛け口から住居壁までの距離が長い点であり、焚口から石製支脚の位置する掛け口まで約0.5mを測るが、さらに掛け口から袖基部の住居壁までの距離は約1.0mを測る。掛け口と袖基部の間には、竈壁体の上面に窪みがあり、この部分に甑の一部が落ち込んだ状態で出土した。土器の出土状況などから、この窪みは掛け口になるとみられ、本例はいわゆる二つ掛けの縦並びの竈と考えられる。西日本では一つ掛けが主流で、二つ掛けの竈は東日本に多いとされるが、横並びが一般的であり[注9]、こうした縦並びは稀有な例である。２基の掛け口のうち、手前の焚口寄りの掛け口は通常の煮炊きに用いられ、奥の掛け口は周囲に著しい被熱痕跡は認められないことから保温に用い、機能を分けていたと考えられる。竈煙道部は住居外にのびる一部を検出したが大部分は削平されていた。また焚口と煙道を結ぶライン上で柱穴を検出しており(第18図)、煙道の煙出しに関連する遺構の可能性がある。住居床面では、５基の土坑を検出した。土坑Ｋ７は、住居の北東辺中央に接する土坑で、２段の掘形をもつ。上段は浅く方形に穿たれ、下段は楕円形状をなす。上段に木蓋などの覆いを用いる貯蔵穴とみられる。住居中央では浅い楕円形状の土坑Ｋ９を検出した。竈脇では、３基の土坑を検出した。このうちＫ１は大形の楕円形状の土坑で、長径約1.1m、短径約0.9m、深さ約0.4mを測る。土坑内から布留式甕２点と椀１点が出土した。また、竈の南東では円形の小形土坑Ｋ８を検出し、土坑内から高杯１点が出土した。出土土器から、住居の時期は古墳時代中期前半～中頃と推定される。

竪穴式住居跡ＳＨ11706(第19図)　調査区の北東隅で検出した方形竪穴式住居跡である。昨年度の京都府教育委員会の試掘調査では、本住居跡の北西角が確認されており、今回の南西側の調



第17図　竪穴式住居跡ＳＨ11710実測図



第18図　竪穴式住居跡ＳＨ11710竈実測図

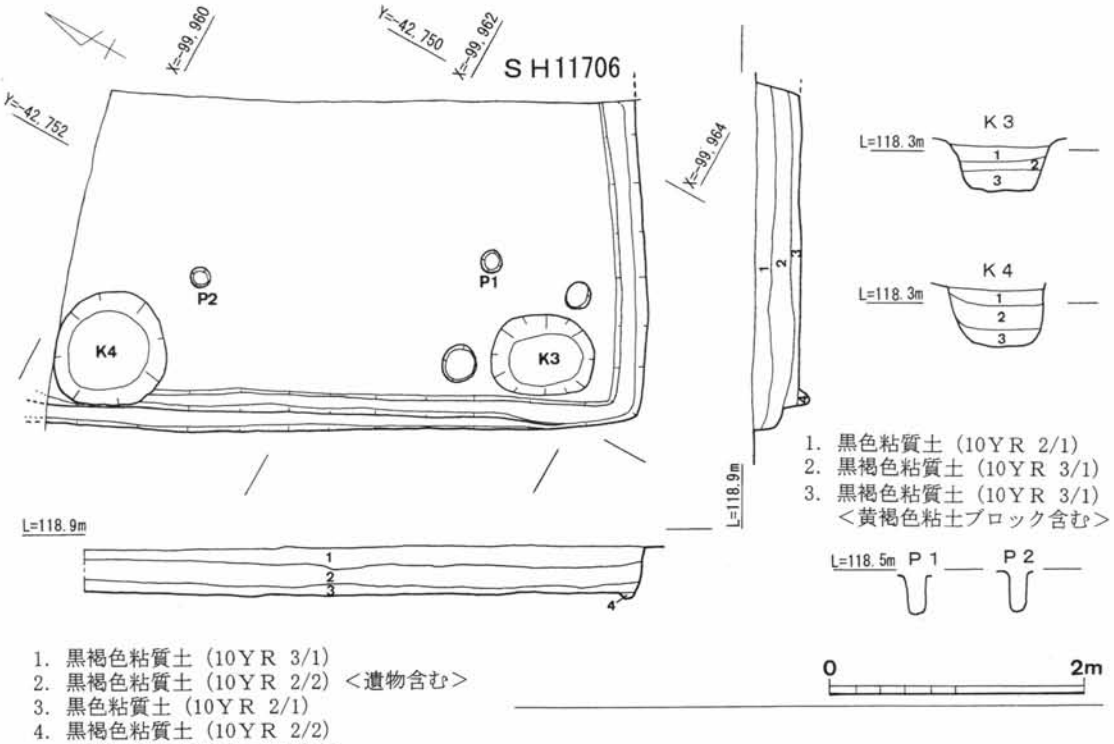
査によって住居跡の規模は一辺約５ｍを測ることが判明した。主軸はN26°Wである。住居の深さは、検出面から約0.3～0.4ｍを測る。西壁と南壁側には幅0.25ｍ、深さ５㎝程の周壁溝を巡らす。床面からは、住居の南西側（Ｐ１）と北西側（Ｐ２）の、対になる主柱穴を２基検出した。径約0.15ｍ、深さ約0.3ｍを測り、二つの柱穴の間隔は2.3ｍを測る。床面からはこのほかに貯蔵穴と思われる土坑を住居跡南西角（Ｋ３）と北西角（Ｋ４）の２か所で検出した。Ｋ３は長径0.8ｍ、短径0.65ｍを測る長楕円で、深さ0.4ｍを測る。内部から土師器甕片が出土した。Ｋ４は径0.9㎝、深さ１ｍ前後を測るやや規模の大きいもので、住居の西壁にほぼ接して掘られている。Ｋ４からは住居の内側に向かって長さ約0.5ｍ、幅約0.1ｍの浅い溝がのびる。住居内の排水に係わるものか。上記以外のものとしては、床面から浅い小ピットを４か所で検出した。京都府教育委員会による東側の調査では、焼土の一部が確認されており、本住居は東側に竈をもつ可能性がある。所属時期は古墳時代中期前半～中頃に比定される。

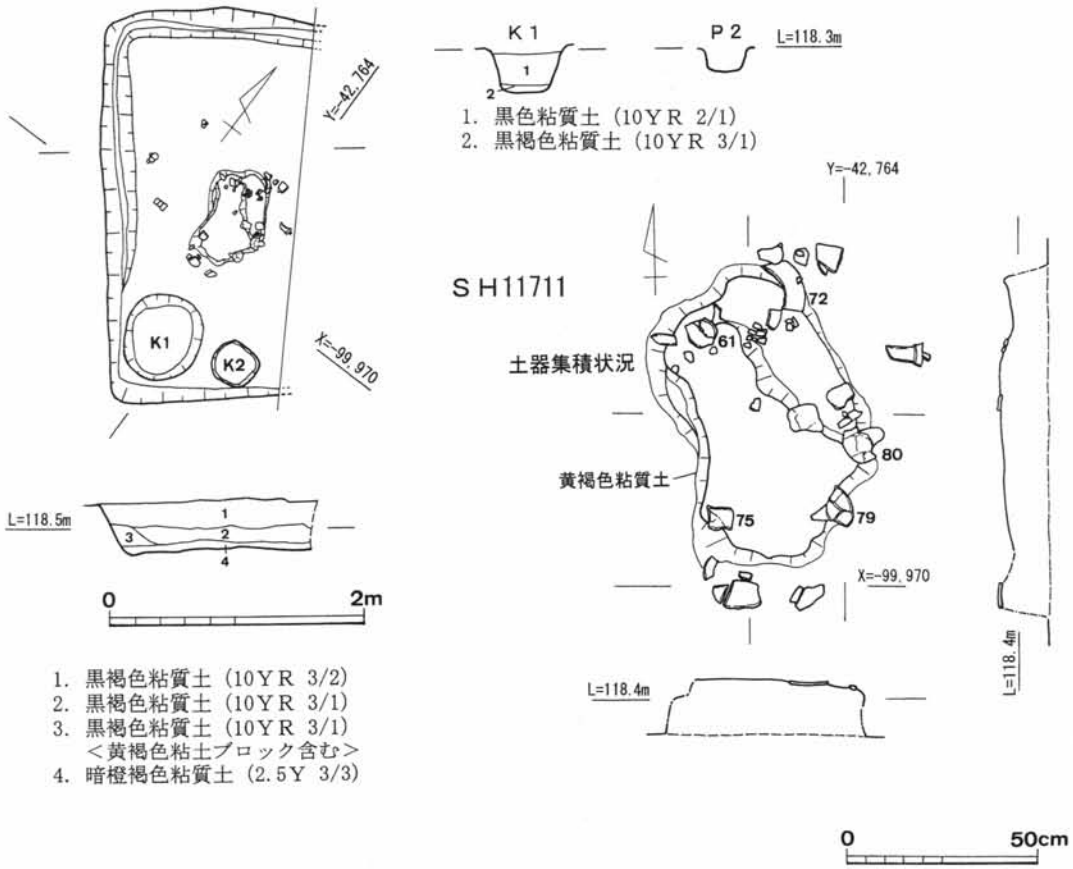
竪穴式住居跡ＳＨ11711（第19図）　ＳＨ11706の南東側約５ｍの位置で検出した方形竪穴式住居跡である。住居跡の東側ほぼ半分は調査地外になる。今回確認できた西壁での規模から一辺の長さ３ｍを測る、やや小形の住居であることが判明した。主軸方向はN37°Wである。今回の調査では、北壁側で長さ1.7ｍ、南壁側で同1.3ｍ分を確認した。住居床の深さは検出面から約0.4ｍを測る。住居の北と西側には、壁際に沿って幅0.2～0.25ｍの周壁溝を付設しているが、南側では検出されなかった。床面の２か所から貯蔵穴と思われる円形土坑を２基（Ｋ１・Ｋ２）検出した。Ｋ１は住居跡の南西角に接して確認したもので、長径0.65ｍ、短径0.55ｍ、深さ0.65ｍを測るやや歪な円形を呈している。Ｋ２は、Ｋ１とは10㎝ほど離れた東側で検出したもので径0.35ｍ、深さ約0.2ｍを測る。住居跡の床面から10㎝ほどの高さで、南北1.2ｍ、東西0.7ｍの範囲にわたって黄褐色粘土の堆積に混じり多数の土師器片がかたまって出土した。これらの土器類は、本住居が廃棄された後、一括して投棄されたものと思われる。なお、床面からは住居の主柱穴が確認されなかったため、床面に直接柱を建てたものと思われる。住居の所属時期は、古墳時代中期前半～中頃に比定される。

掘立柱建物跡ＳＢ11729（第20図）　調査地中央西よりで検出した、桁行３間（9.2ｍ）、梁行２間（4.5ｍ）の規模をもつ東西棟の掘立柱建物跡である。建物の主軸方向はN63°Wである。柱掘形は、楕円形ないしやや不整形な隅丸方形を呈し、長辺約0.4～0.5ｍ、短辺約0.3ｍ、深さは0.3ｍ前後を測る。柱痕跡を残すものでは柱穴の径10㎝を測る。各柱間の間隔は、桁行方向で約2.7～3.0ｍ（９～10尺）、梁行方向で約2.1～2.4ｍ（７～８尺）と不揃いで、やや桁行の方が長い。この建物は、溝ＳＤ11715・11717・11718と重複し、溝が埋まった後に建てられている。出土遺物が少なく、所属時期についての詳細は不明であるが概ね平安時代後期に属するものと想定される。

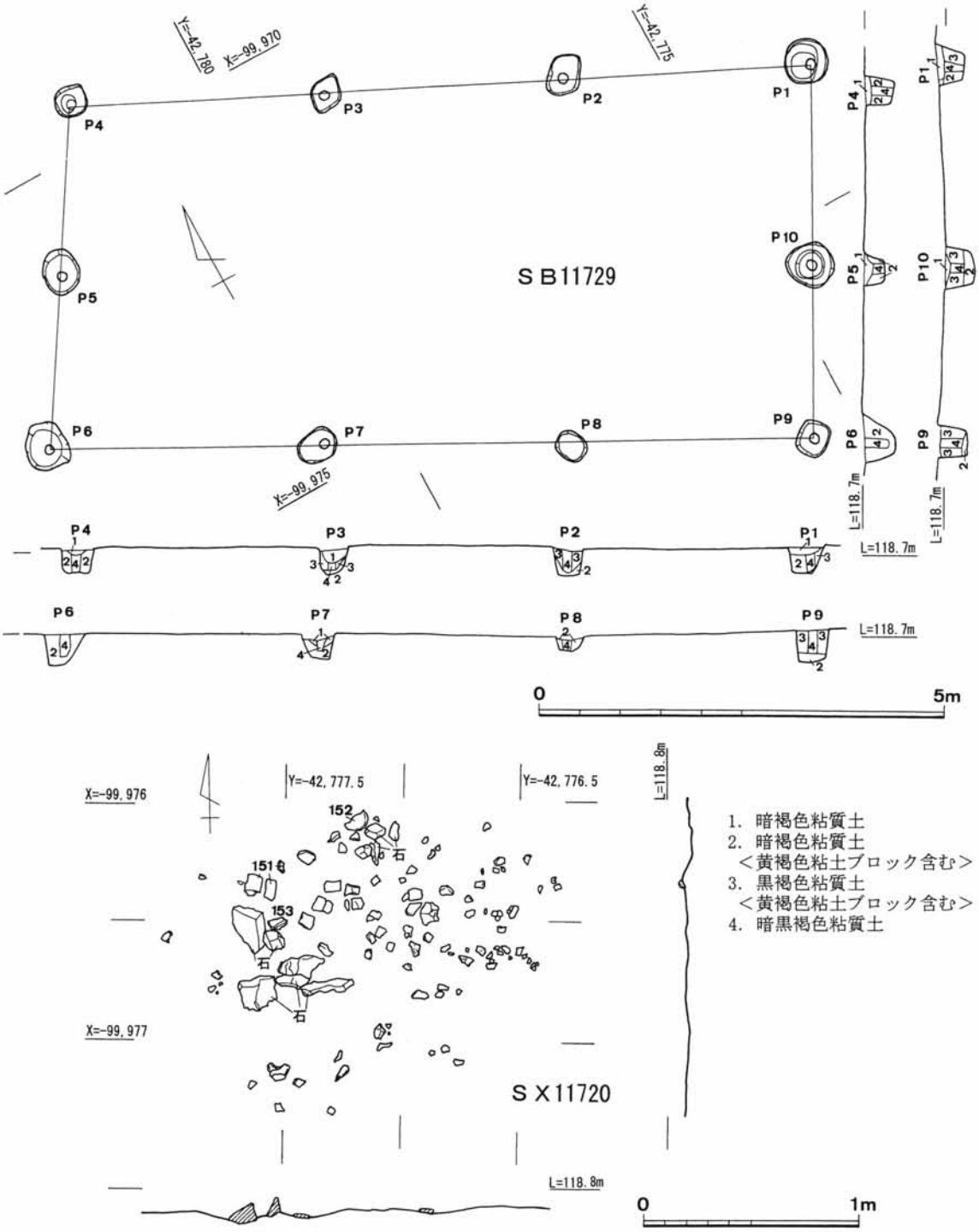
柵列ＳＡ11716（第15図）　北西から南東方向にのびる柵列で、調査地内で柵列の北端と思われる柱穴１基を検出した。南側の京都府教育委員会の調査地では３間分が検出されている。

溝ＳＤ11701（第21図）　北西から南東方向に斜行してのびる、幅1.2ｍ、深さ0.5ｍを測る溝である。溝断面は２段掘りの形状を示しており、下段の溝の幅は70㎝とやや狭くなる。ＳＨ11706





第19図　竪穴式住居跡ＳＨ11706・11711実測図

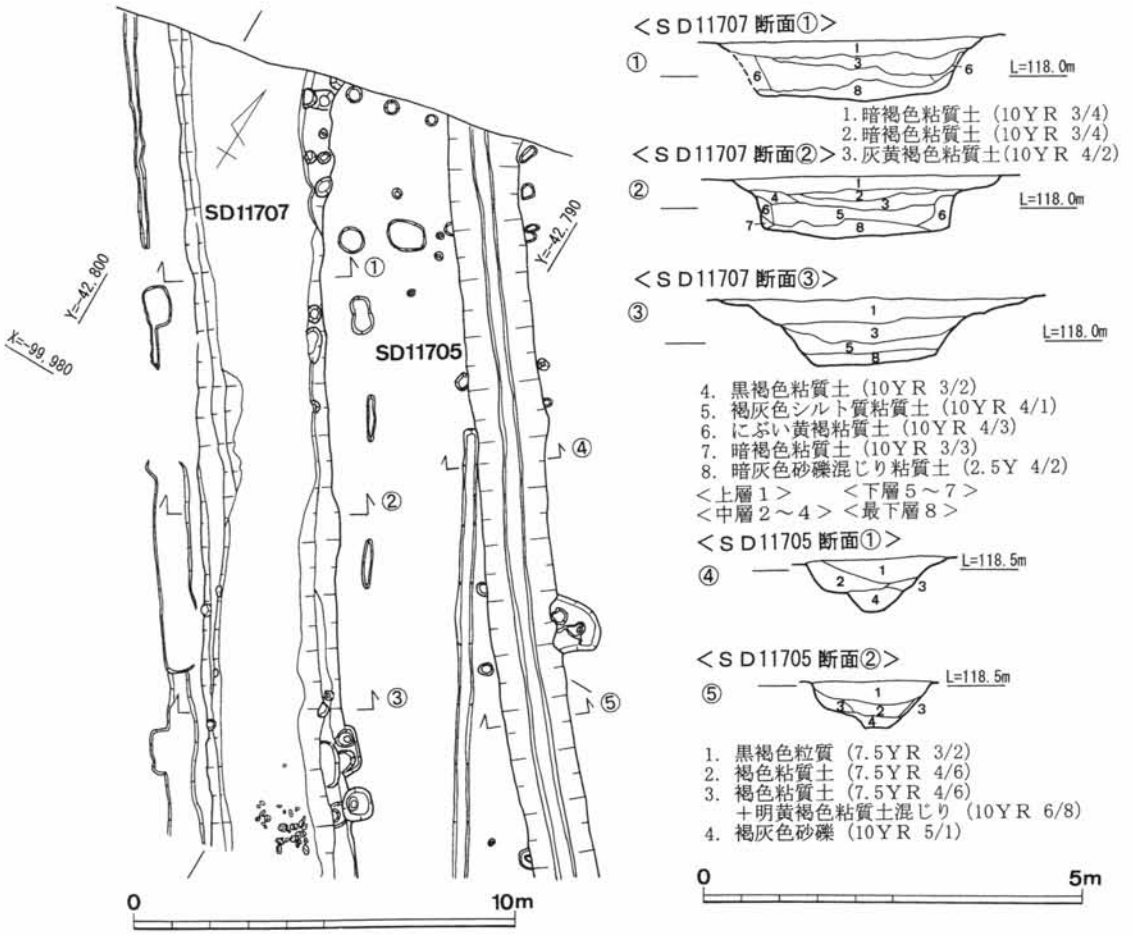


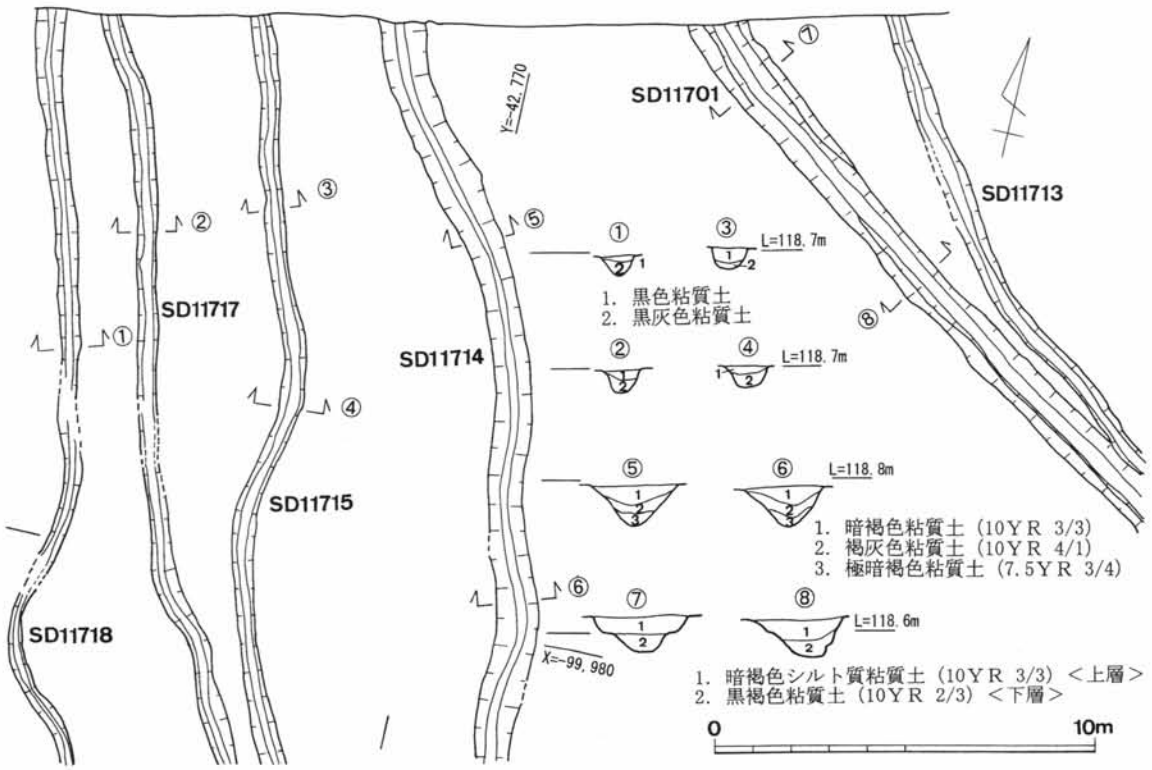
第20図　掘立柱建物跡ＳＢ11729・土器溜まりＳＸ11720実測図

が埋まった後に掘削されたものである。所属時期は奈良時代後葉～平安時代初頭とみられる。

溝ＳＤ11705(第21図)　ＳＤ11707の東側に平行してのびる、幅２ｍ、深さ約0.5ｍを測る溝である。断面は逆台形状を呈するが、中程から一段深く掘り込まれ両側に段を形成する。溝の最下層には砂礫層がみられ流路として機能していたことが窺われる。溝からの出土遺物は少ないが、須恵器片の出土からみて奈良時代後半頃に所属するものとみられる。

溝ＳＤ11707(第21図)　調査地の西側部で検出した、北西から南東方向にほぼ直線的にのびる





第21図　溝ＳＤ11707・11705実測図・７区溝群実測図

溝である。幅約４ｍ、深さ約1.5ｍを測り、今回調査地で検出したほかの溝に比べ規模が大きい。溝の断面形は、溝肩から急に落ち込む逆台形状を呈しており、溝底は平坦である。今回の調査範囲では延長25ｍにわたり調査を実施したが、この大溝はさらに南側の南丹市教育委員会の調査範囲にのびており、調査地全体で確認された総延長は約47ｍにおよぶ。溝の最下層には、流水を示す砂礫層が堆積するが、上層は粘質土層が厚く堆積しており、滞水を繰り返しながら埋没したものと思われる。今回調査を行った溝南端付近では、溝底からやや浮いた状態で、10～30cm大の石塊が２ｍ×1.5ｍの範囲にわたって多数出土した。これらの集石は、溝に伴う堰や護岸などに使用された石が転落したものとも考えられる。また、溝の両肩には大小のピットが穿たれており、護岸の杭跡の可能性がある。このほか溝の西肩に沿って平行する浅い溝状遺構（ＳＤ11725）が途中途切れながら走るが本遺構との関連は不明である。構内からは、主に平安時代後期の土師器、瓦器、白磁片が多く出土した。土器の多くは溝の中層から出土しているが、下層から出土した土器から、溝の時期はおおよそ11世紀後葉～12世紀前葉と推定される。出土遺物にはわずかながら奈良時代後半～平安時代初頭（８世紀後半～９世紀初頭）の土器が含まれる。東側で同様な時期の小規模な溝が併走していることから、こうした溝がほぼ同じ位置に重複していた可能性がある。

溝ＳＤ11712（第21図）　調査地南東角で検出した溝で幅0.4ｍ、深さ0.2ｍを測る。西側で途切れており、後述するＳＤ11713、ＳＤ11716と関連するかは不明である。

溝ＳＤ11713（第21図）　今回調査地の東側で検出した幅0.45ｍ、深さ0.3ｍを測る断面Ｕ字状の溝である。北西から南東方向に斜行して走る。ＳＨ11710はこの溝の埋没後、建てられておりこの溝の方が古い。所属時期は奈良時代と思われる。

溝ＳＤ11714（第21図）　ほぼ調査地中央部を南北に縦断する形でのびる幅１ｍ、深さ0.5ｍを測る溝で、溝の断面はＶ字状を呈している。

溝ＳＤ11715（第21図）　北から南に向かってやや蛇行しながらのびる溝で、幅0.5ｍ、深さ0.25ｍを測る。溝の断面形は逆台形状を呈する。ＳＢ11720と一部重複しておりこの溝の方が古い。所属時期は奈良時代と思われる。

溝ＳＤ11717（第21図）　ＳＤ11715と類似する溝で、北から南に向かってやや蛇行しながらのびる。溝幅0.5ｍ、深さ0.25ｍを測る。溝の断面形は逆台形状を呈する。ＳＢ11720と一部重複し、この溝が先行する。所属時期は奈良時代後半と思われる。

溝ＳＤ11718（第21図）　ＳＤ11715・11717と類似する溝で、北から南に向かってやや蛇行しながらのびる。溝幅0.5ｍ、深さ0.25ｍを測る。溝の断面形は逆台形状を呈する。ＳＢ11720と一部重複し、この溝が先行する。所属時期は奈良時代と思われる。

土器溜まりＳＸ11020（第20図）　土器および石材が集中して出土した遺構で、長軸約２ｍ、短軸約1.8ｍの範囲に広がる。ＳＤ11717が埋まった後に形成されており、明確な掘りこみ等はみとめられなかった。石材は10～20cm大で角をもつ山石が大部分である。出土した土器類は主に瓦器、土師器類で、故意に破砕されたように細片になっているものがほとんどである。これらの石材や土器類に混じって部分的に焼土がみられた。

c．出土遺物

今回の調査で出土した遺物の総量は、１区～７区まで合わせて整理箱約27箱を数える。

(i)北地区(１～６区)出土遺物

１区溝ＳＤ11101(第22図)　１・２・４は、１区ＳＤ11101の最上層である灰色砂礫混じり粘質土層から出土した。ＳＤ11101の廃絶後の層位である。１は、土師器甕である。口縁部は短く屈曲して外方へ開き、端部に沈線をもつ。石英・チャートなど砂粒を多量に含んだ粗い胎土をもち、淡橙灰褐色を呈する。口径約40cmを測る。時期は奈良時代とみられる。２は、土師器羽釜である。内傾する口縁をなし、内面端部は内側に拡張する。口径約18.2cmを測る。４は、平底の須恵器甕底部である。底径約17.0cmを測る。３は、須恵器杯Ｂである。口径16.5cm、高さ4.5cmを測る。

１区包含層(第22図)　５・６は、１区包含層中から出土した。５は、瓦質土器の羽釜である。短い鍔をもつ。６は、瓦器椀である。器面は、磨滅が著しくヘラミガキは観察できない。口径約13.0cmを測る。24は、１区南部包含層中から出土した打製石鏃である。基部は凹基をなす。長さ1.5cm、厚さ0.3cmを測る。瑪瑙製(玉髄)で、おおよそ縄文時代前期の石鏃とみられる。

２区包含層(第22図)　７は、耕作土直下の灰色粘質土層中から出土した染付椀底部である。

４区掘立柱建物跡ＳＢ11405(第22図)　８は、ＳＢ11405の柱穴Ｐ38から出土した須恵器杯蓋である。平坦な天井部をなし、端部にかえりをもつ。残存率は約５割程度であるが、杯蓋の中央に近い部分が残存し、宝珠つまみの剥離痕がみられないことから、つまみをもたない杯蓋とみられる。口径15.2cm、器高2.5cmを測る。８世紀後半～９世紀初頭に帰属する資料である。

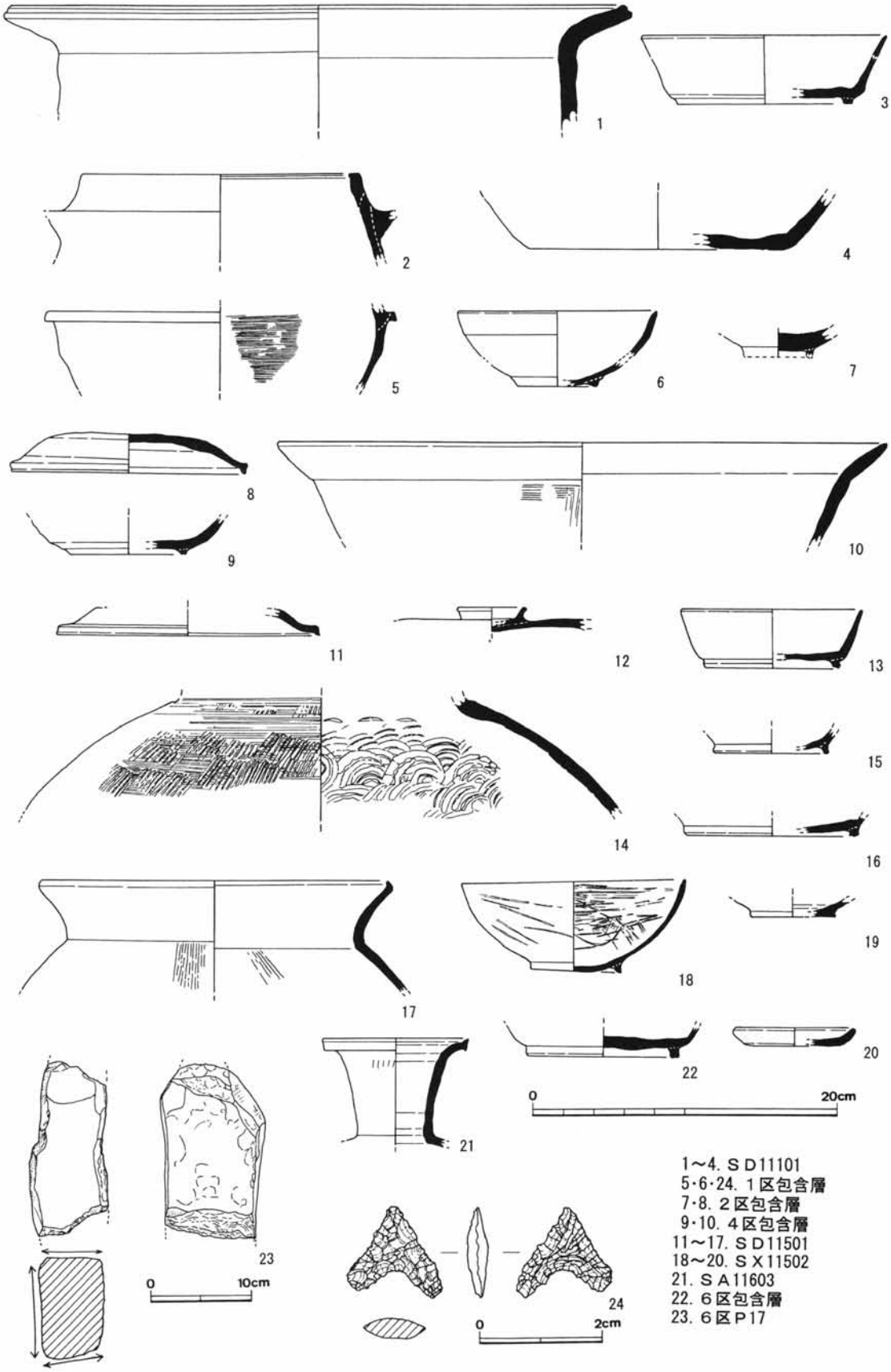
４区包含層(第22図)　９の施釉陶器は、器壁の内外面に施釉され、削り出し高台をもつ。10は、土師器鍋である。屈曲して外方に大きく開く口縁部をなす。

５区溝ＳＤ11501(第22図)　11～16は、ＳＤ11501から出土した。11は、須恵器杯Ｂ蓋である。口径はおおよそ17.2cmに復原できる。12は、環状つまみをもつ須恵器蓋である。13は、須恵器杯Ｂで、浅い杯部をもつ。口径12.0cm、高さ3.8cmを測る。15は、須恵器杯Ｂの底部とみられる。底径は大きく径10.9cmを測る。14は、須恵器甕の体部である。外面に縄目タタキを、また内面に同心円文タタキを施す。17は、土師器甕の口縁部である。口縁部は、くの字状をなし、外反気味に立ち上がる。口縁端部を上方につまみあげる奈良時代の甕である。胎土は石英・長石・チャート等を含み、色調は淡橙褐色を呈する。口径は、おおよそ22.6cmに復原できる。11～17の時期は、８世紀末～９世紀前葉に帰属する。

５区落ち込みＳＸ11502(第22図)　18～20は、ＳＸ11502から出土した。18は、瓦器椀である。内外面の磨滅が著しく、ヘラミガキは確認できない。口径は14.6cm、高さ6.0cmを測る。19は、須恵器壺の底部である。糸切りがみとめられる。20は、土師皿である。外面に一段ナデを施す。口径7.8cm、高さ1.2cmを測る。

６区柱穴Ｐ17(第22図)　23は、６区柱穴Ｐ17から出土した砂岩製砥石である。柱穴の根石に転用されていたもので、折損している。３面に砥面をもつ。長さ17.2cm、厚さ6.1cmを測る。

６区柱列ＳＡ11603(第22図)　21は、６区ＳＡ11603から出土した須恵器小形壺である。口縁端



第22図　室橋遺跡出土遺物実測図（１）

部に面をなし、上下に拡張する。口径9.6cmを測る。

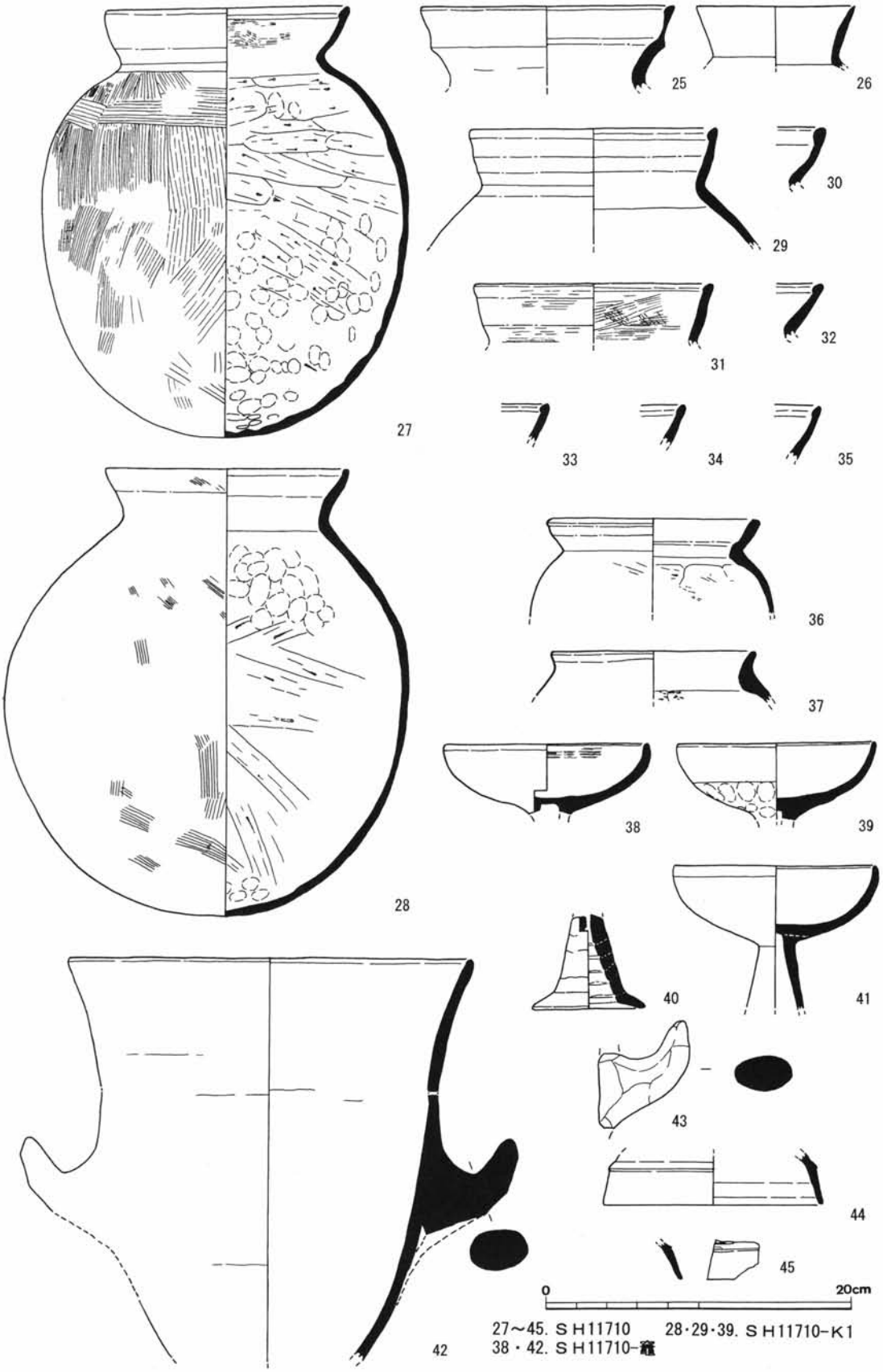
6区包含層(第22図)　22は、東部排水溝から出土した須恵器杯Bの底部である。

(ii)南地区(7区)出土遺物

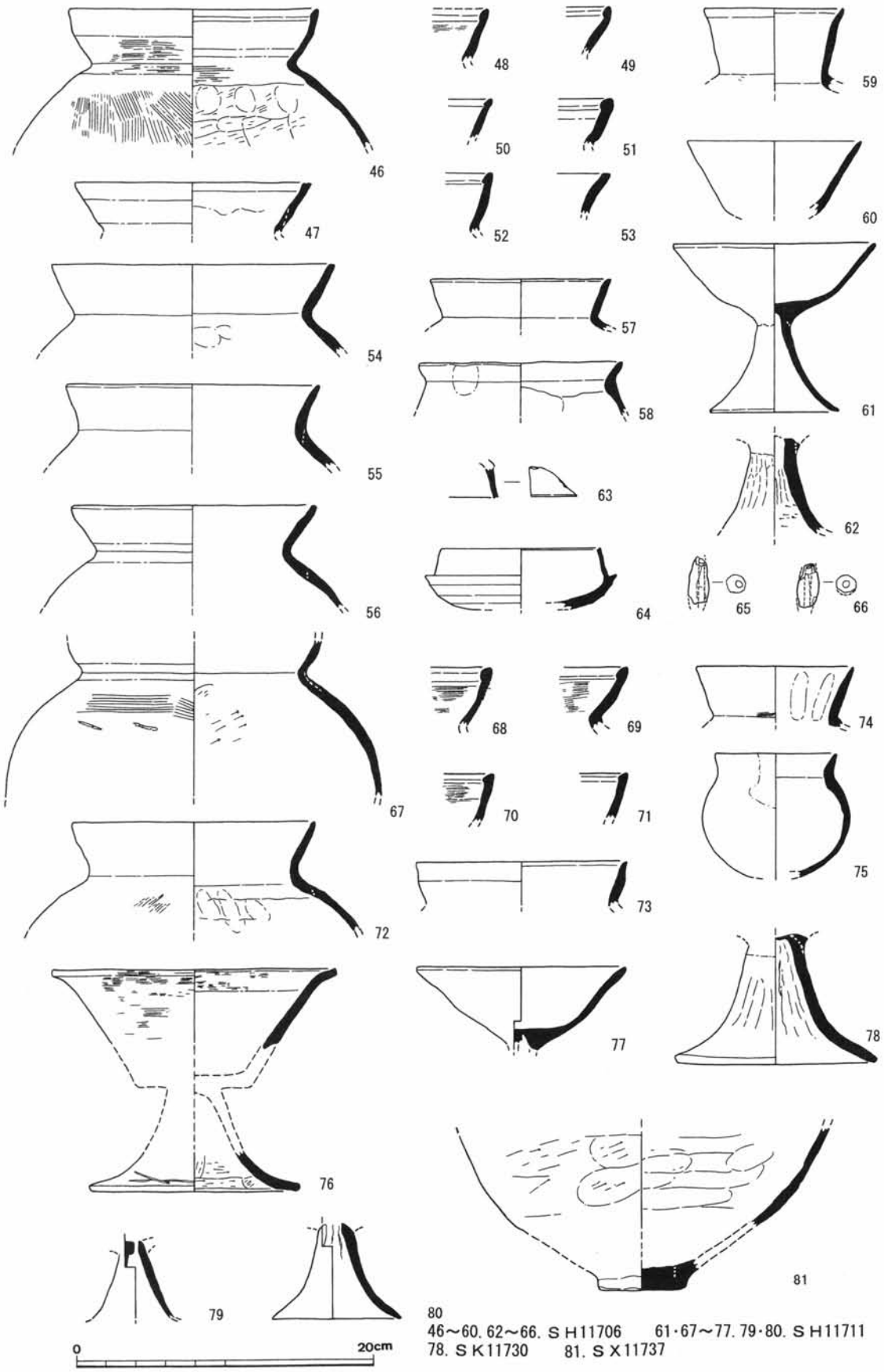
7地区の出土遺物は、大きく竪穴式住居跡に伴う古墳時代のものと、溝そのほかの遺構に伴う奈良・平安時代以降の遺物に分けられる。奈良・平安時代以降の遺物の多くは溝SD11707から出土したものである。

竪穴住居跡SH11710(第23図)　28・29・39はK1、32・38・42は竈、27・34・45は床面直上、他は埋土から出土した。布留式土器は組成が重要であると考え、SH11006・11011ともに破片であっても別個体となるものは図示した。25・26は壺である。25は口縁部に屈曲をもつ二重口縁壺、26は口縁部が直線的に立ち上がる直口壺である。27～35は口縁端部内面の肥厚する布留式甕、36・37は口縁端部を単純に終わらせる甕である。27は口径15.6cm、器高28.1cmを測り、明確に肥厚する口縁端部、肩部ヨコハケ、内面ヘラケズリ、底部内面の指頭圧痕、といった布留式甕の要素を兼ね備えている。外面は目の粗いタテハケのち肩部ヨコハケ、内面ヘラケズリは肩部内面で右回り方向に変化し、指頭圧痕は底部と肩部で確認できる。色調は橙褐色を呈する。28は口径15.8cm、器高29.3cmを測り、口縁端部内面はわずかに肥厚し、外面は縦方向のハケ、肩部と底部の内面には指頭圧痕が見られ、内面ヘラケズリは肩部指頭圧痕付近では右回り方向に変化する。27に比べ肩部ヨコハケが欠落し、焼成も甘く磨滅が著しい。色調は淡白黄褐色を呈する。27～35の布留式甕口縁端部は、27では明瞭に肥厚しながら内傾する面をもち、29・32では断面三角形、30では大きく肥厚し断面円形、33は肥厚部の折り返しが内側に入り込み、35では肥厚部が内面に段をなし、31・34では27に比べ緩やかに肥厚し、28ではわずかに肥厚する。36は口縁端部に外傾する面をもって肥厚せず、外面はナデによって沈線状をなし、体部内面をヘラケズリで仕上げる。37は短く外反する口縁部をもち、体部内面をヘラケズリで仕上げる。体部の一部は歪んでいる。38～41は高杯であり、38・39・41はいずれも口縁端部を単純におさめる椀形の杯部をもち、40は屈曲部をもつ高杯脚部である。全体的に摩滅が著しいが、38の端部内面にはわずかにヨコハケ、39の外面にはユビオサエ痕が確認できる。40は内面に粘土つなぎ痕を明瞭にとどめ、上部には刺突孔が施される。色調は、38・40が橙褐色、39が淡黄褐色、41が明赤褐色を呈する。42・43は甑である。42はやや外反する口縁部とすぼまる底部をもち、大きく上方に湾曲する把手を付す。底部は残存しないものの、破損部直下から屈曲して蒸気孔をもつ平底を形成していたものと思われる。43は甑の把手であるが、42とは出土位置が大きく異なり、胎土もわずかに異なることから別個体と考えられる。42・43とも色調は淡赤白灰色である。44・45は須恵器杯蓋である。いずれも稜は明瞭であるが大きく突出はせず、端部もややシャープさに欠ける。TK208～23型式併行と考えられる。SH11006とともに、布留式甕と須恵器の共伴事例として貴重である。

竪穴住居跡SH11706(第24図)　46は住居内土坑K3、57・58は柱穴P2、56は床面直上、他は埋土から出土した。59は直口壺の口縁部である。器壁の凹凸が激しく、やや雑に仕上げられている。46～52は布留式甕である。46は口径16.4cmを測り、口縁端部内面を肥厚させるが、肩部外



第23図　室橋遺跡出土遺物実測図（2）



第24図　室橋遺跡出土遺物実測図（３）

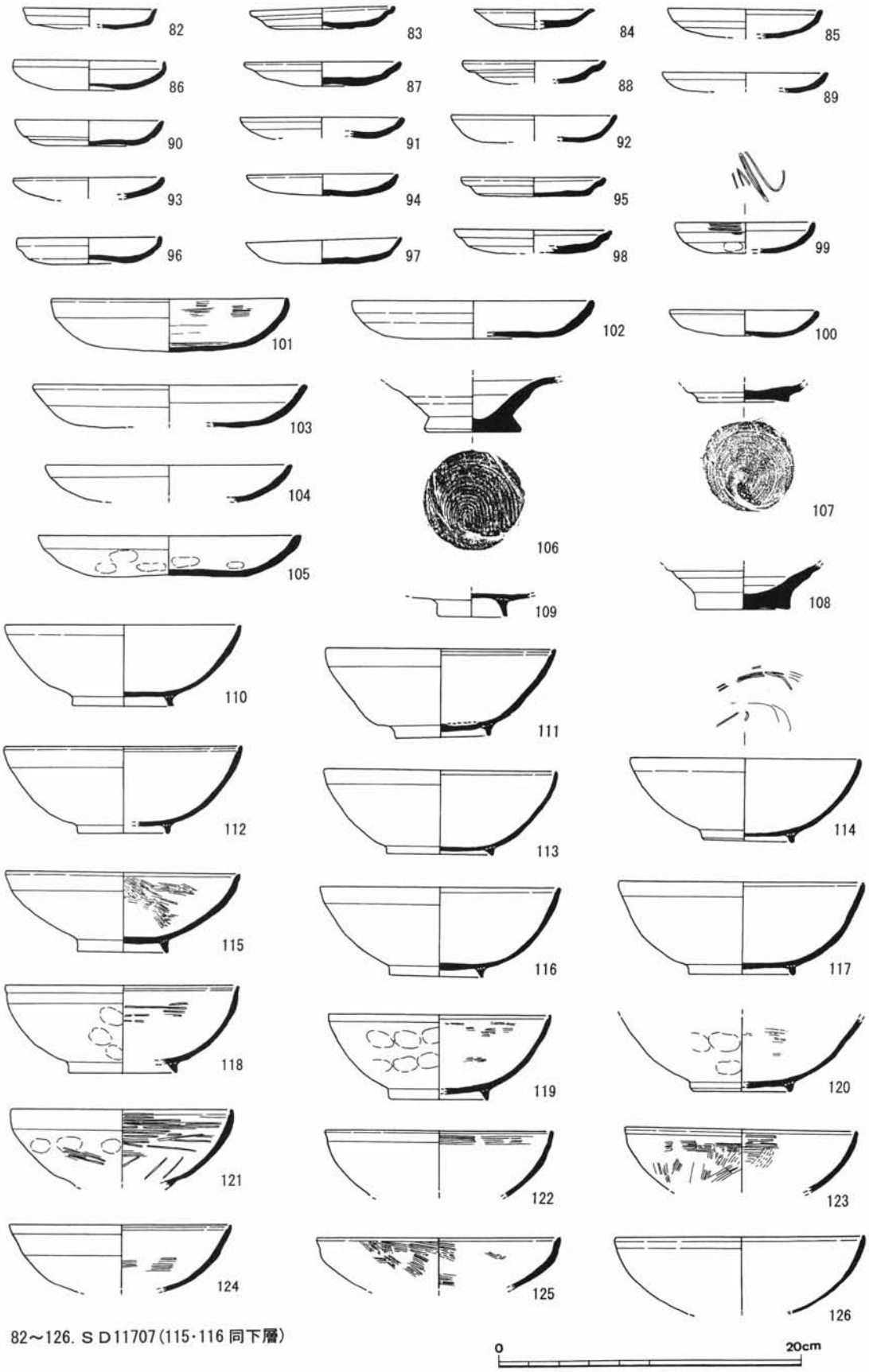
面のヨコハケは認められず、27・28と同様に肩部内面に指頭圧痕を残す。頸部内面上方にはナデの境目が突線状をなしている。色調は橙褐色である。47は口縁部の中位で体部とは異なる粘土をつないでおり、口縁端部の肥厚した面に沈線が入る。46～52は布留式甕の口縁端部で、46は緩やかな断面三角形、48・49は断面楕円形、47は上方に向けて面をもち、51は大きく肥厚し断面円形、50・52は肥厚部の折り返しが内側に入り込む。53～58は口縁端部を単純に終わらせる甕である。53は口縁部内面をごくわずかに肥厚する傾向があるが、口縁自体は外反する。54は、肩部内面に指頭圧痕が認められる。56は頸部内面にやや強めのナデが入る布留式甕の要素をもつが、口縁端部内面はごくわずかに肥厚する傾向をもつにとどまる。54～57は、表面の磨滅が著しい。58は37と類似した形態で、短く外反する口縁部をもって体部内面をヘラケズリで仕上げている。60～62は高杯で、60・61は無稜外反高杯である。61は口径13.7cm、底径8.6cmを測り、口縁端部はやや厚みを増しながら丸く仕上げ、色調は明赤黄褐色である。62は、60・61に比べしっかりとした作りの高杯脚部で、外面は縦方向の押圧、内面はヘラケズリを施しており、76と同様な有稜高杯である。63・64は須恵器杯身・杯蓋である。63は端部平坦面が沈線状をなす。64は口径10.7cmを測り、立ち上がりは高く、口縁端部平坦面は沈線状をなし、受け部の端部はやや丸みを帯びるＴＫ208～23型式併行と考えられる。65・66は土錘である。

竪穴住居跡ＳＨ11711(第24図)　67～77・79・80は埋土から出土した。74・75は小形丸底壺である。74は直線的に伸びる口縁部をもち、外面は横方向の細いミガキ、内面は強めのナデが入る。75は短く外反する口縁部をもつ。67～71は布留式甕、72・73は口縁端部を単純に終わらせる甕である。67は端部が残存しないものの、頸部の強いヨコナデや肩部ヨコハケをもち、肩部ヨコハケの下位にハケ工具による列点を加える、色調は暗赤褐色を呈する布留式甕である。68～71は布留式甕の口縁部で、68は大きく肥厚し断面円形、69は断面楕円形、70・71は断面三角形状をなす。72は、口縁端部をやや肥厚ぎみに仕上げるが布留式甕とはならない。73は、口縁端部をややつまみ出しぎみに仕上げる。76・77・79・80は高杯である。76は口径19.2cm、底径14.2cmを測り、口縁部は外面と端部内面をヨコナデし、脚部は内面ヘラケズリ外面ナデの後、Ｘ状のヘラ記号を加える色調明赤褐色の大形有稜高杯である。77は無稜外反高杯で、杯底部外面には刺突孔をもつ。79・80は緩やかに外反する高杯脚部で、79は脚頂部に刺突孔をもつ。

土坑ＳＫ11730出土遺物(第24図)　出土遺物は78のみである。底径13.4cmを測り、外面は縦方向の押圧を加える高杯の脚部である。

落ち込みＳＸ11737(第24図)　出土遺物は81のみである。胎土に角閃石を多量に含む生駒山西麓産の壺底部である。外面は横方向のヘラケズリ、内面は強いナデを施す。底部は包含層出土であるが、特徴的胎土から同一個体とみて間違いないであろう。

溝ＳＤ11707(第25・26図82～146)　82～104は土師器皿である。口径８～11cm、器高1.3～1.7cm前後を測る小形のもの(82～100)と、口径16～17cm、器高2.5cm前後を測るやや大形のもの(101～104)に分けられる。口縁部は横ナデを施し、口縁端部は丸く収めるものがほとんどであるが、83・88・95・98は口縁端部が「て」の字状を呈しやや外反する。105は内外面に指オサエの



82～126. ＳＤ11707(115･116 同下層)

第25図　室橋遺跡出土遺物実測図（４）

痕が残る。106～109は土師器椀または杯類の底部である。106は平高台でやや大ぶりなもの、107・108は回転糸切り高台、109は貼り付け高台をもつ。

110～129は瓦器椀である。口径15～16cm、器高５～６cm前後を測り、口縁部は体部から内湾気味に立ち上がる。口縁部端は丸く収めており、内面に１条の沈線を施す。体部の内外面には緻密なミガキが施される。底部の残るものでは、高台の径約６cm、高さ0.6cm前後を測り、断面は逆台形状を呈する。99・100は瓦器皿で、口径９cm、器高２cm前後を測る。口縁部は内湾気味に外上方にのび、口縁端部は丸く仕上げる。底部から体部外面にかけて指オサエの痕がみられる。99の見込み部にはジグザグ状のミガキが施されている。

130・131は須恵器杯である。底部から体部が直に立ち上がり、口縁部は外上方にのびる。底部に貼り付け高台をもつ。132は貼り付け高台をもつ壺底部とみられる。体部の下半部の一部に釉がかかる。133は平高台をもつ須恵器椀である。高台の底部には回転糸切り痕がのこる。134はやや軟質の須恵器鉢で口径31.4cmを測る。口縁および体部は底部から斜め上方に直線的にのび、口縁端部は強いナデを施し、面をなす。色調は灰白色を呈する。135は硬質の須恵器鉢で、口径35cmに復原される。口縁端部の内外面に自然釉がかかる。

136は東海系と思われる陶器甕の底部である。平底で径14cmを測る。体部下半に暗灰緑色の釉がかかる。137は須恵器四耳壺または三耳壺の肩に付く把手飾りとみられる。平面が略五角形の扁平な粘土板を貼り付けるもので中央に円孔を穿つ。

138～143は中国製の白磁椀である。139の口縁端部は細身の玉縁口縁、140・141は端部を折り返した厚身の玉縁口縁をもつ。142・143は断面逆台形状の貼り付け高台をもつ。底部と体部下半は無釉である。144は中国製の白磁皿である。底部は無釉で一段削り込む碁笥底をなす。

145～147は土師器羽釜で、口径20～22cm前後を測る。口縁部は胴部から内傾しながら内上方へのびる。鍔部は水平にのび断面は扁平な逆台形を呈する。147の口縁端部の内面にはハケメを施す。口縁部外面には煤が付着する。このほか土器以外のものとして鉄滓(157)がある。

ＳＤ11707から出土した遺物は、概ね11世紀後半～12世紀前半に属するものと考えられるが、130・131の須恵器杯は、奈良時代末から平安時代初頭の８世紀末頃に属するものみられる。

溝ＳＤ11703(第26図)　148は須恵器甑で径9.8cm、高さ２cmの底部の内側に器壁の厚い胴部がとりつく。底部には小坑を穿つ。

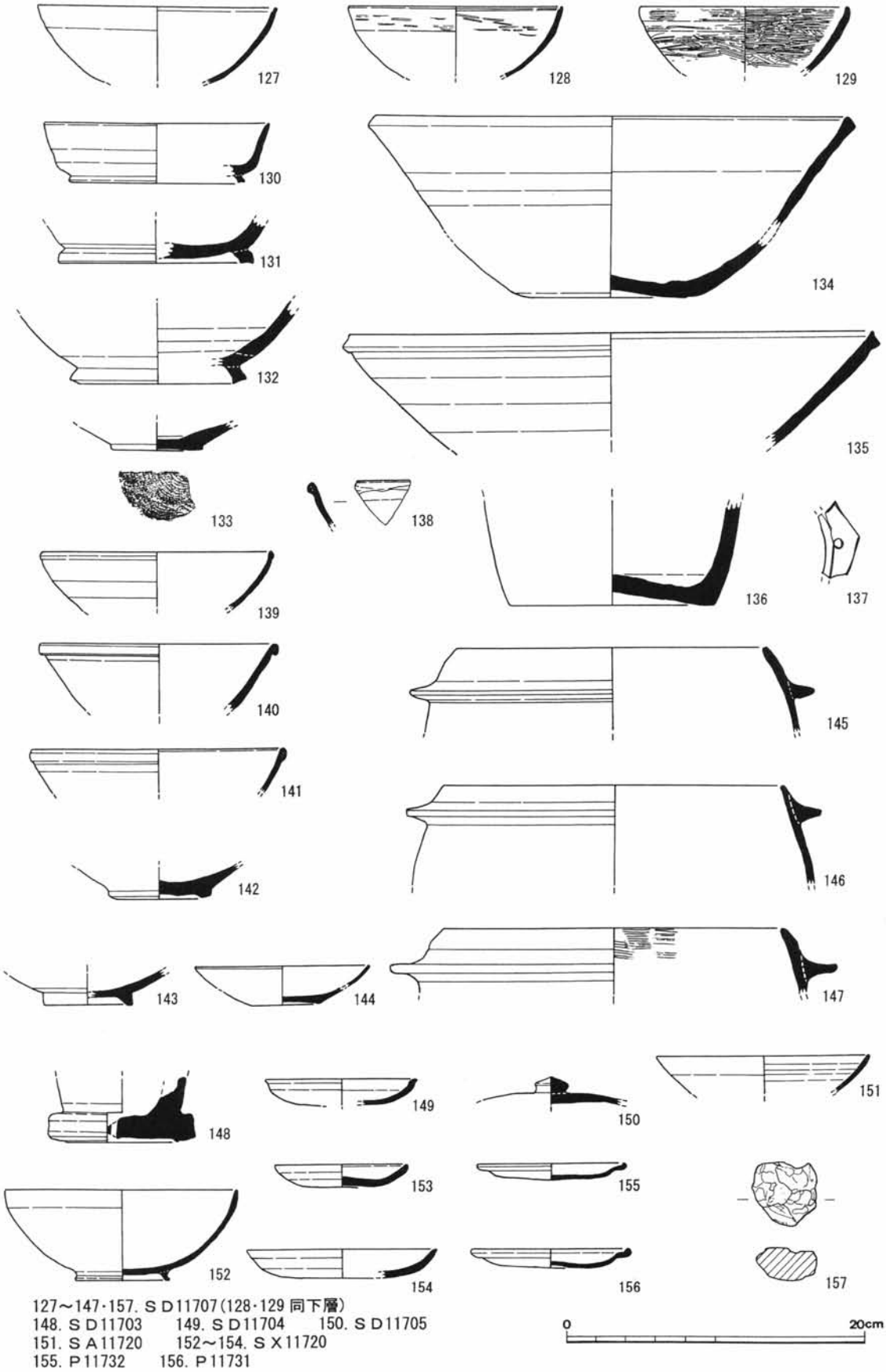
溝ＳＤ11704(第26図)　149は、土師皿である。口径10cm、器高1.3cmを測る。

溝ＳＤ11705(第26図)　150は、須恵器杯蓋である。頂部に宝珠状のつまみをもつ。

柵列11711(第26図)　151は、須恵器杯である。口径14.6cm、器高６cmを測る。

土器溜まりＳＸ11720(第26図)　152～154が出土した。152は瓦器椀である。口径15.6cm、器高６cmを測る。断面三角形状の貼り付け高台をもつ。153は土師器皿である。

柱穴Ｐ11732・Ｐ11731(第26図)　155はＰ11732から、156はＰ11731から出土した。「て」の字状の口縁をもつ土師皿である。155は口径9.75cm、器高1.15cm前後を測り、156は口径10.3cm、器高1.3cm前後を測る。色調は乳白褐色を呈する。



127～147・157. ＳＤ11707（128・129 同下層）
148. ＳＤ11703　149. ＳＤ11704　150. ＳＤ11705
151. ＳＡ11720　152～154. ＳＸ11720
155. Ｐ11732　156. Ｐ11731

第26図　室橋遺跡出土遺物実測図（５）

(2)野条遺跡第13次

調査概要

今回の調査は、標高117m前後の水田地帯に幅3.6m、長さ56mの東西長の試掘トレンチを設定し、遺構、遺物の有無を確認することを目的とした。周辺は南北に細長い畦畔が見られ、一筆毎に序々に南に低くなる。調査の結果、溝跡３条、杭跡を検出したが、遺物は皆無であった。

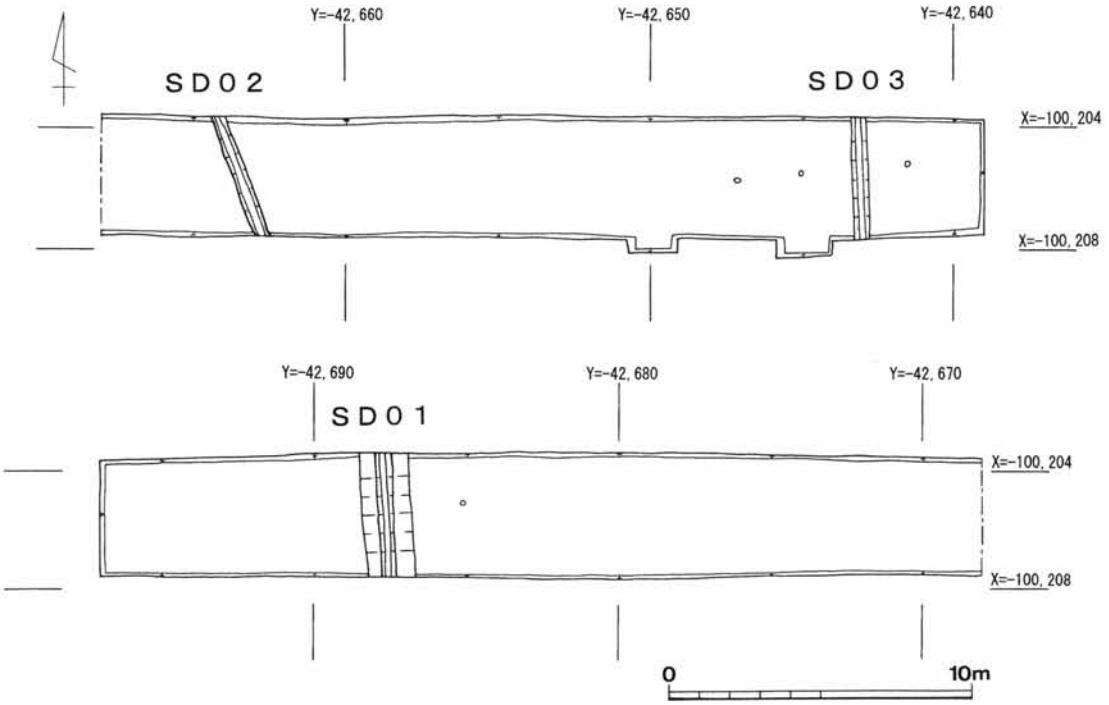
調査地の基本的な土層(堆積土)は、現代耕作土である暗黒灰色泥土(土層図には表示なし、１層の上層)以下、１層(明黄褐色粘質土)、２・３層(黒色粘性土、淡黒色粘性土)、４層(淡暗褐色粘質土)、５層(明黄褐色粘質土)である。１層は現代耕作土の床土、２・３層は削平による整地された旧耕作土、４層は一部黒ボク層が堆積する地山である。５・６層は、トレンチ東半部に堆積し、造成による整地層である。何れも、遺物は皆無である。

検出した遺構は溝ＳＤ01～03、杭跡等である。

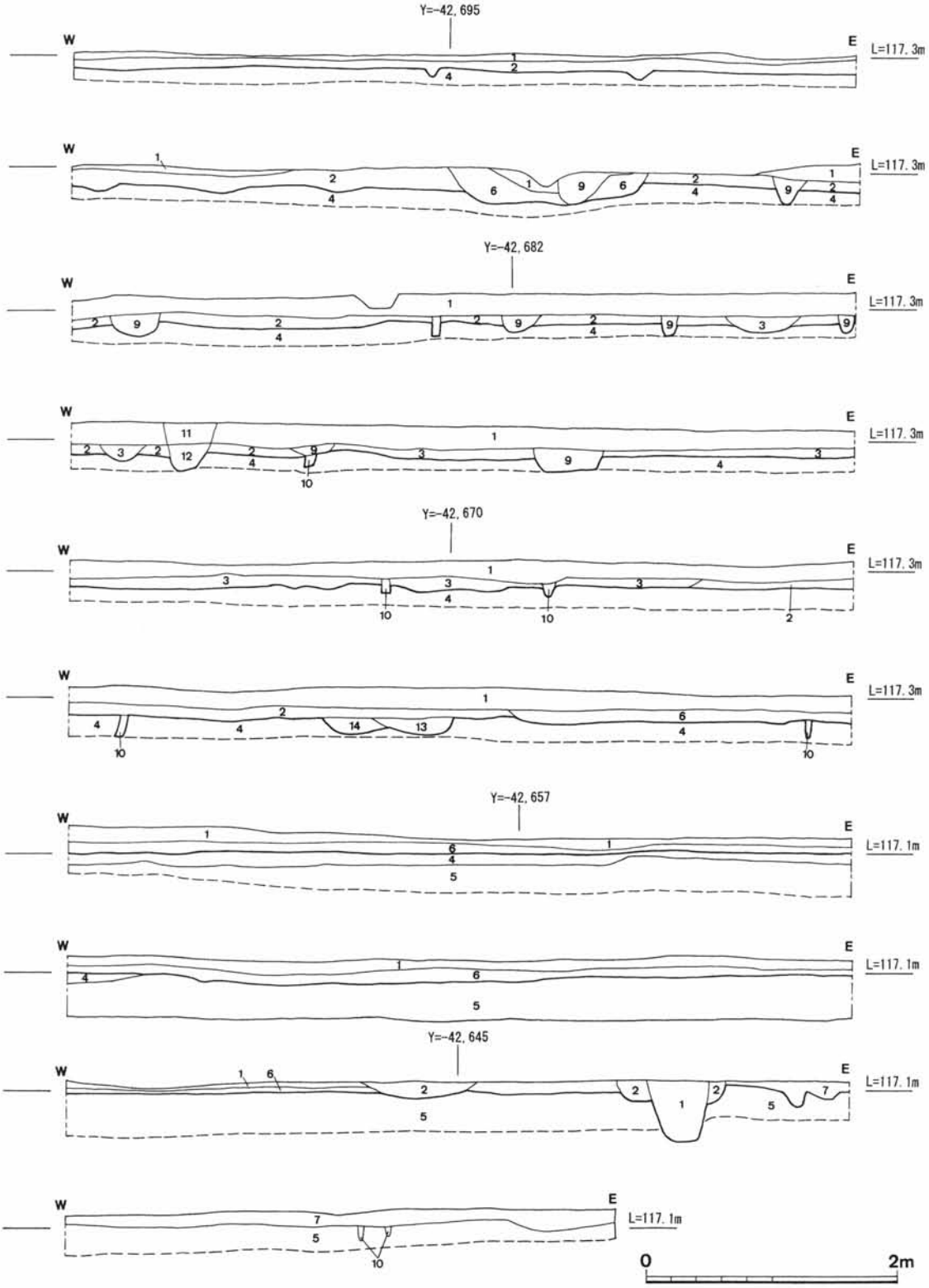
溝ＳＤ01　トレンチ西側で検出した南北方向(Ｎ３°Ｗ)の溝である。幅1.5m、深さ0.5mを測り、堆積土は、上層では現代の耕作土である暗黒灰色泥土、下層では１層と暗黒灰色泥土の混合層である。現代の用水路である。

溝ＳＤ02　トレンチ東側で検出した南北方向(N25°Ｗ)の溝である。幅0.3m、深さ0.35mを測り、堆積土は、上層では現代の耕作土である暗黒灰色泥土、下層では１・２層の混合層である。水田に関わる暗渠排水溝である。

溝ＳＤ03　トレンチ中央部で検出した南北方向(Ｎ１°Ｗ)の溝である。幅0.5m、深さ0.45m



第27図　野条遺跡第13次調査区実測図



1. 明黄灰色粘質土
2. 黒色粘質土
3. 淡黒色粘質土
4. 淡褐色粘質土
5. 明黄褐色粘質土
6. 淡暗褐色粘質土
7. 黄褐色粘質土
＋黒色粘質土＜小砂礫含む＞
8. 黒褐色粘質土
9. 黒色粘質土
10. 暗褐色粘質土
11. 黄灰色粘質土
12. 杭跡＜1･2･4層の混合層＞
13. ＳＤ01＜2･5層の混合層＞
14. ＳＤ01＜淡黒色粘質土，砂礫含む＞

第28図　野条遺跡調査区土層断面図

を測り、堆積土は、上層では１層床土と黒色泥土の混合層である。底面には割り竹が据えられており、この溝も水田に関わる暗渠排水溝である。

杭跡　直径0.2m～0.3mの小柱穴を検出したが、柱の痕跡、埋土等は判然としなかった。およそ、稲木、立ち木の痕跡と思われる。

調査の結果、検出遺構、土層堆積状況から現代の水田は畦畔の改変、水田一筆の拡張等、近代に耕地整備が行われたものと思われる。ＳＤ01とＳＤ02は大きく方位が異なる。出土遺物は無いが、土層堆積状況から時期差が認められ、耕地整備以前の水田が営まれていたことがうかがえる。

まとめ

今回の調査では、室橋遺跡の北部（１～６区）と南部（７区）で約2,000㎡の調査を実施し、野条遺跡北端で試掘調査を実施した。

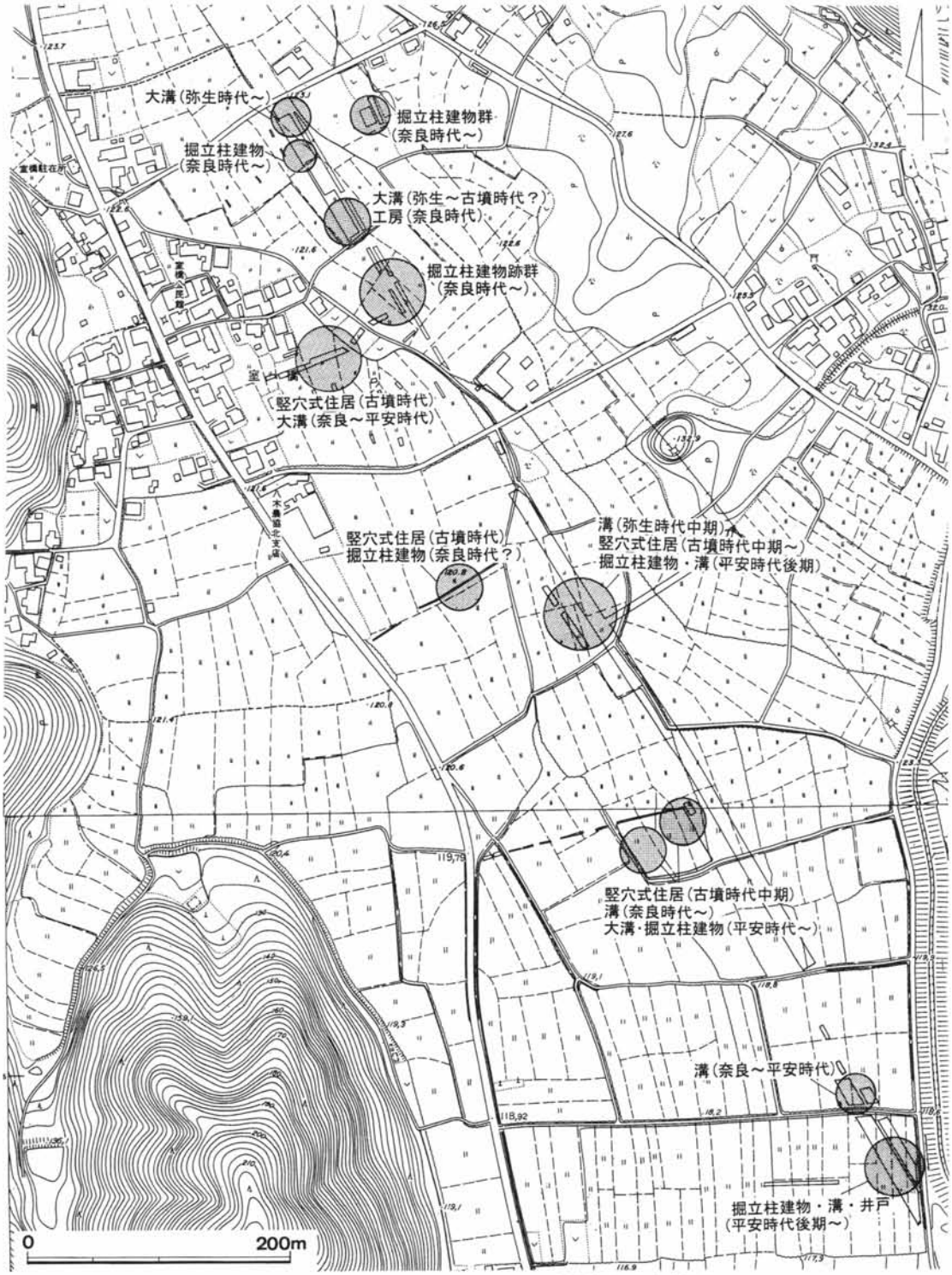
室橋遺跡北区の調査では、１区北端で弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と推定される溝の南東延長部を検出した。断面形は台形状をなし、幅５～６ｍの規模をもつとみられる大規模な溝である。また２区でも、大規模な溝を検出したが、この溝は断面形がｖ字形をなす防御性が高い溝であり、北から南へ直線的に掘削されていることが判明した。第５次調査で検出した溝と連続し、最終的な埋没時期が古墳時代前期前葉と推定されている。溝の東側は集落の立地に適した高台となっており、これらは集落の西側縁辺に掘削された大溝と推定される。

北区の３・４・６区では、奈良～平安時代にかけての掘立柱建物跡群や柱列を検出した。過去の調査でも北区各所で奈良～平安時代前期の方形掘形の柱穴から構成される掘立柱建物跡群が検出され、一帯が奈良時代に新たに開発され、集落規模が大きく拡大すると考えられる。

北区では、５区で奈良～平安時代初頭にかけての灌漑用水とみられる大溝を検出した。また、５区では平安時代末期に再掘削されたとみられる溝状の落ち込みを検出した。出土遺物が少なく断定はできないが、平安時代中期～後期に開削された溝を再掘削している可能性がある。

室橋遺跡南区の調査では、古墳～平安時代にかけての遺構が検出され、室橋遺跡南部における集落の一端が明らかになってきた。７区では、古墳時代中期の竪穴式住居跡３基を検出し、南部に古墳時代中期の集落が広がること確認した。このうち、竪穴式住居跡ＳＨ11710は、造り付けの竈をもつ古墳時代中期前半の住居跡で、近畿地方のなかでも竈が普及する比較的早い時期に竈を導入したものであることが判明した。その構造には特色があり、近畿地方で一般にみられる掛け口を一つもつ形態ではなく、縦に二つの掛け口をもつ竈であることが判明した。燃焼部直上の掛け口を煮炊きに用い、後方の掛け口を保温に使用し、機能を使い分けたものと考えられる。室橋遺跡では、北区で行われた第４次調査でも、古墳時代中期前半の竈を有する住居跡が調査されているが、周辺の遺跡では諸畑遺跡で古墳時代中期前葉の最古級の竈が検出され、近畿地方でもいち早く竈を導入し、定着した地域として注目される。

奈良～平安時代にかけての遺構は、大小８条の溝を検出した。このうち溝ＳＤ11707は、幅約



第29図　室橋遺跡・野条遺跡主要遺構検出地点位置図

４ｍの大溝で、主に平安時代後期の11世紀後半～12世紀前葉に帰属する土器が出土した。この溝については、約200ｍ離れた地点で調査された野条遺跡第10次・12次調査２区で検出した溝ＳＤ201に繋がる可能性があり、11世紀後半に広範囲に灌漑用水が整備された可能性がある。７区では、このほかに幅２ｍの溝１条、幅約１ｍの溝２条、さらに幅約0.5ｍ前後の小規模な溝群を検出したが、これらは出土土器から、奈良時代後半～平安時代前期に掘削された溝と推定される。

室橋遺跡の調査では、弥生時代から平安時代にかけての遺構を南北約600ｍにわたる広い範囲

で確認し、室橋遺跡が長期にわたって営まれた大規模な複合集落遺跡となることを確認した。古墳時代中期の住居跡は、これまでの第４～７次調査で北部や南部の各所で確認され、古墳時代中期～後期に新たな開発が進み、集落規模が急激に拡大することが判明した。また、奈良時代から平安時代初頭にかけては、北部を中心に掘立柱建物跡群の存在が明らかにされているが、今回の調査でも大形掘立柱建物跡の一部や、灌漑用水とみられる大規模な溝を検出した。平安時代末期の遺構は過去の調査ではほとんど確認されていなかったが、５区の調査で12世紀中頃に再掘削されたとみられる溝状の落ち込みを検出した。室橋遺跡周辺は、平安時代末期に存在した荘園「吉富荘」に含まれ、平安時代の伝承が多く残る地域であり、文治４年(1188年)には神護寺を再興した文覚の主導により灌漑用水が引かれたとされる。今回検出した遺構は、やや先行する時期ではあるが、現在の新庄用水と近接してほぼ平行に掘削され、同様な位置に古代に遡る灌漑用水が存在した可能性を示している。今回の調査では、奈良～平安時代の灌漑にかかわる再開発の可能性を具体的に示す資料が得られ、この地域の水田開発の歴史をひもとく貴重な資料が得られた。

注１　調査参加者は以下のとおりである(敬称略、順不同)

（作業員）　梅井ゆき子・西垣久江・松本敏子・松本安治・浅田節子・田中千枝子・松倉和美・浅田あさの・中山田健一・浅田忠晴・宅間文治・福本正吉・八木辰男・松本拓・三觜順子・平井美登里・野村治・平井義次・西田恵美子

（補助員）　蜂谷友佳子・中川慎也・廣瀬慶典・橋爪侑也・松本亨太・野中洋志・中居和志・井川怜・山下秀平・田中里奈・長谷川裕美・丹上新太・油井一貴

（整理員）　陸田初代・丸谷はま子・中島恵美子・荒川仁佳子・中居和志・長谷川裕美・堀川多津子・槻啓宏・川那辺由美子・井上祐子・村岡弥生

注２　高野陽子「野条遺跡第10・12次、室橋遺跡第５次」(『京都府遺跡調査報告集』第127冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2008

注３　測定は、(株)加速器分析研究所に委託した。測定結果は、ＢＣ350～310年(13.1%)・同210～110年(55.1%)とＢＣ360～280年(46.2%)・同240～190(22.0%)である。

注４　測定結果は、ＡＤ985～1025年であり、過去の調査の年代観と大きな隔たりを生じた。

注５　調査成果については、平成20年度に当センターから報告する予定である。

注６　測定結果は、ＡＤ1255～1285年である。

注７　測定結果は、上層はＡＤ685～775年、下層はＡＤ895～925年(23.1%)・同940～995年(45.1%)である。

注８　福島孝行「府営農業整備事業関係遺跡　平成18年度発掘調査報告」(『京都府埋蔵文化財調査報告書』(平成18年度)－２　京都府教育委員会)　2007

注９　杉井健「竈の地域性とその背景」(『考古学研究』第40巻第1号　考古学研究会)　1993

図　　版

府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」関係遺跡　図版第１

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

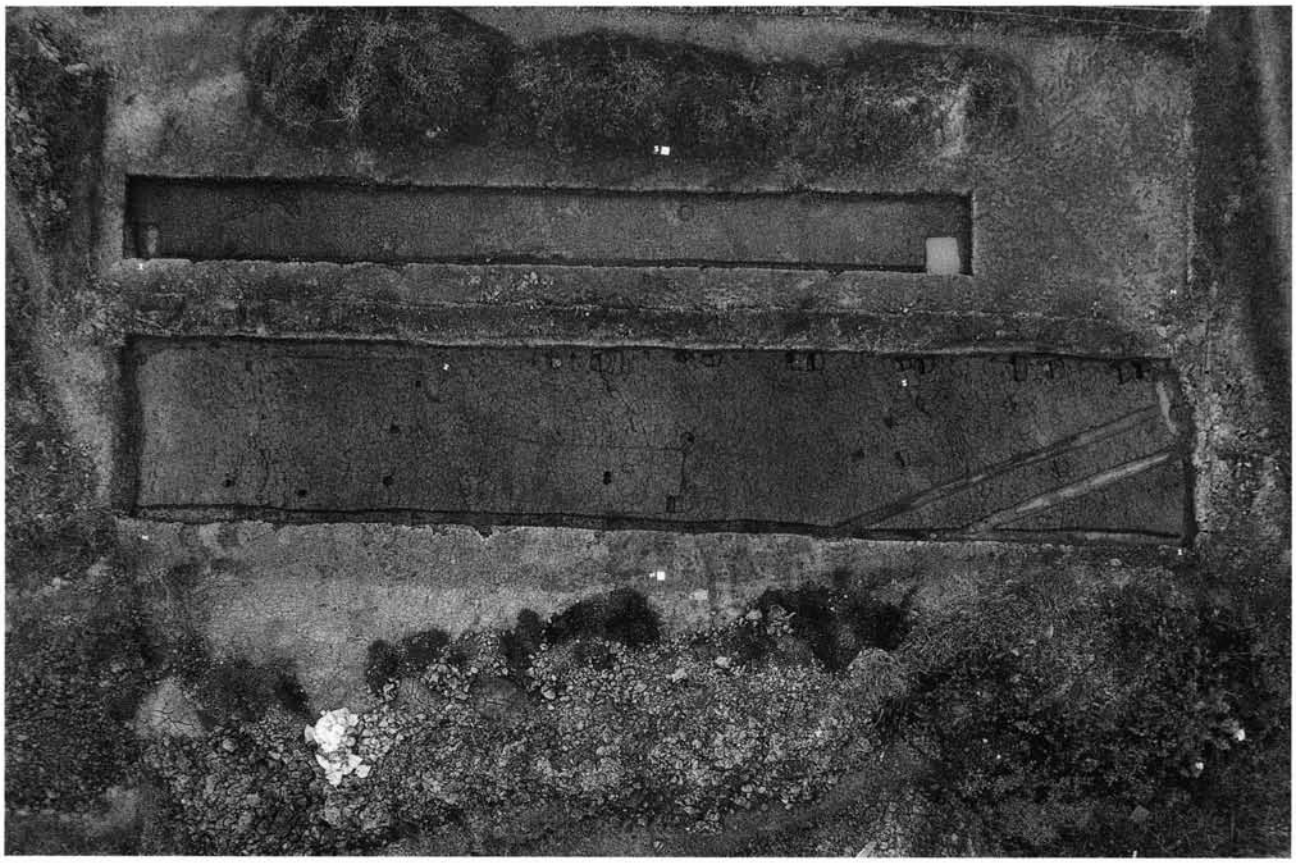
(1)室橋遺跡遠景(北西から)

(2)室橋遺跡近景(南東から)

府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」関係遺跡　図版第２

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

(1) １区・２区調査地全景(上が北東)



(2) ３区調査地全景(上が南西)

府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」関係遺跡　図版第３

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

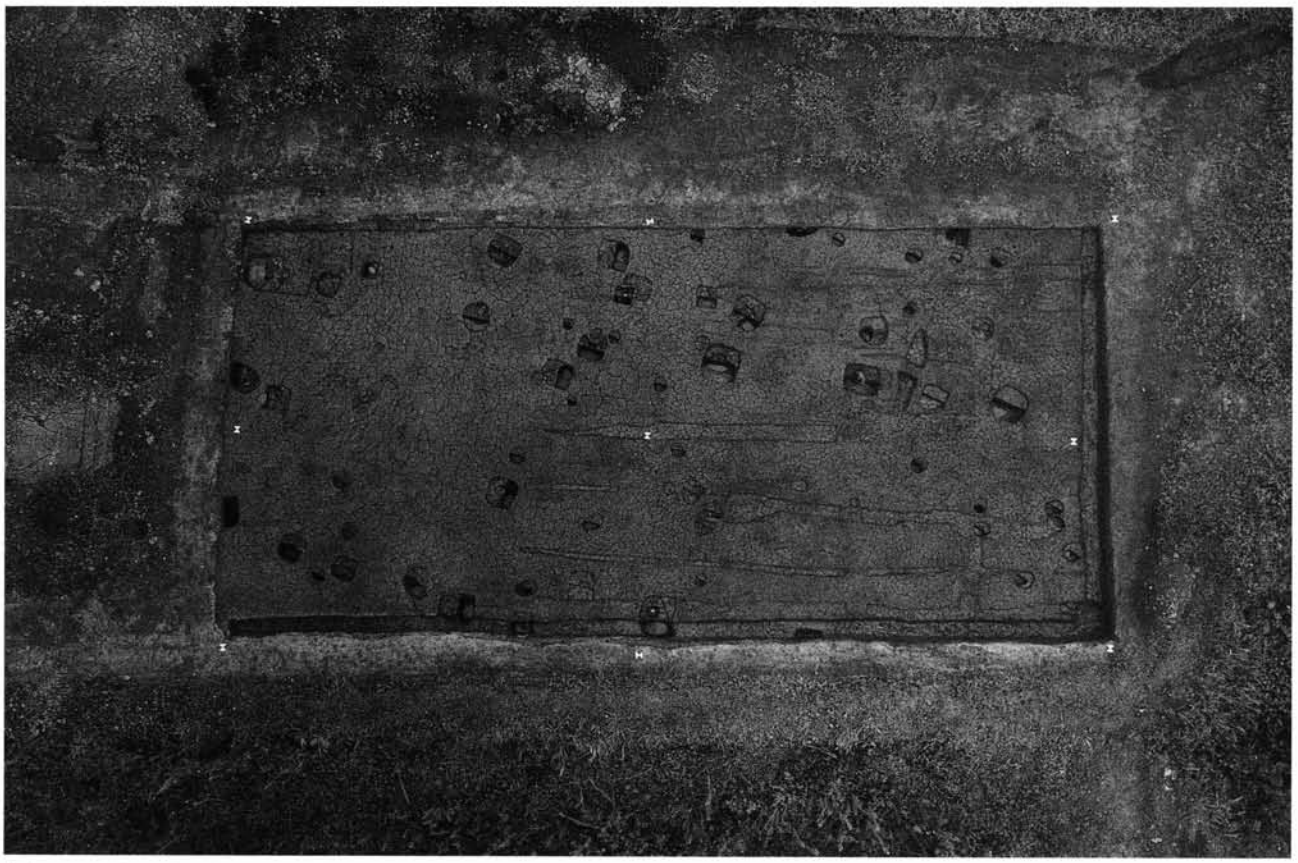
(1) ３区・４区・５区調査地全景(上が北東)

(2) ５区調査地全景(上が北東)

府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」関係遺跡　図版第４

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

(1)室橋遺跡北部近景(北西から)



(2) 6区調査地全景(上が北東)

(1) １区溝ＳＤ11101(東から)

(2) ５区溝ＳＤ11501・落ち込みＳＸ11502(北西から)

府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」関係遺跡　図版第６

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

(1)室橋遺跡北地区調査前風景
(北西から)

(2) 1 区東壁土層断面(北西から)

(3) 1 区調査地全景(南東から)

府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」関係遺跡　図版第７

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

(1) １区溝ＳＤ11101(南東から)

(2) １区溝ＳＤ11101(東から)

(3) １区溝ＳＤ11101土層断面
(東から)

(1) ２区調査地全景(南東から)

(2) ２区調査地全景(南東から)

(3) ２区溝ＳＤ11201土層断面
(南から)

(1) ３区調査地全景(北西から)

(2) ３区柱列ＳＢ11302(北東から)

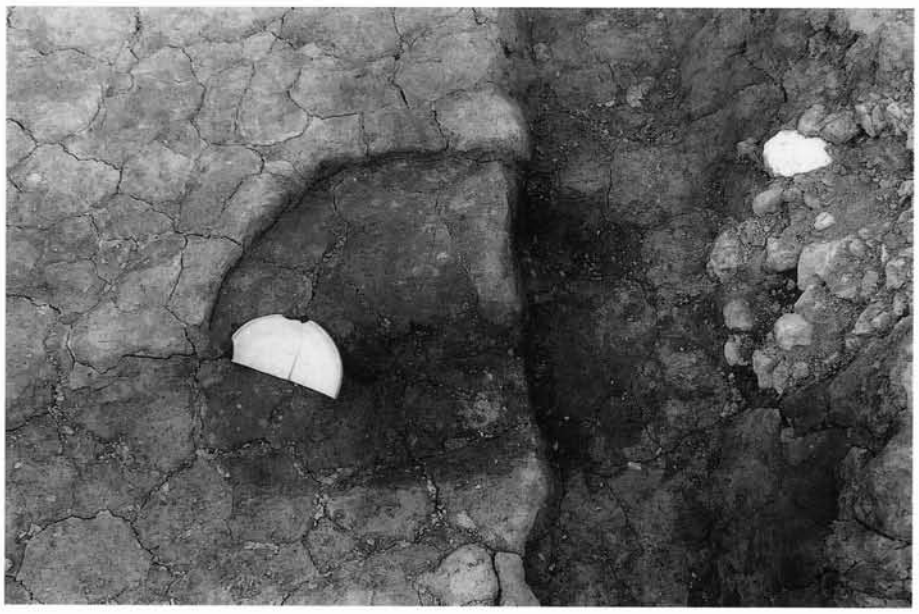
(3) ４区調査地全景(南東から)

府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」関係遺跡　図版第10

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

(1) 4区調査地北部全景
(上が南西)

(2) 4区掘立柱建物跡ＳＢ11407
(南東から)



(3) 4区掘立柱建物跡ＳＢ11405－
Ｐ１遺物出土状況(上が北西)

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

(1) 4区土坑ＳＫ11409・
ＳＫ11410(北西から)

(2) 4区ＳＫ11410(西から)

(3) 4区土坑ＳＫ11408(南西から)

(1) 5区東壁土層断面(南西から)

(2) 5区溝ＳＤ11501(南東から)

(3) 5区溝ＳＤ11501(南東から)

(1) 5区落ち込みＳＸ11502と
新庄用水(南東から)

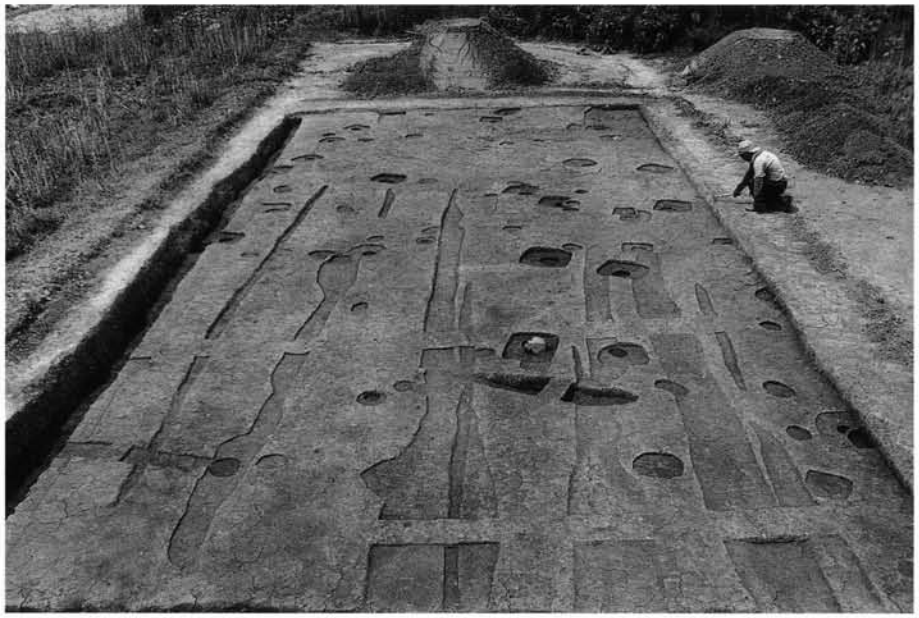
(2) 5区落ち込みＳＸ11502
(南東から)

(3) 5区落ち込みＳＸ11502
遺物出土状況(南東から)

府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」関係遺跡　図版第14

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

(1)室橋遺跡北地区北東部近景
(西から)



(2) 6 区調査地全景(南東から)

(3) 6 区調査地全景(北西から)

(1) 6区掘立柱建物跡ＳＢ11601
（南から）

(2) 6区掘立柱建物跡ＳＢ11602－
Ｐ12（東から）

(3) 6区柱列ＳＡ11603－Ｐ９
（北から）

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

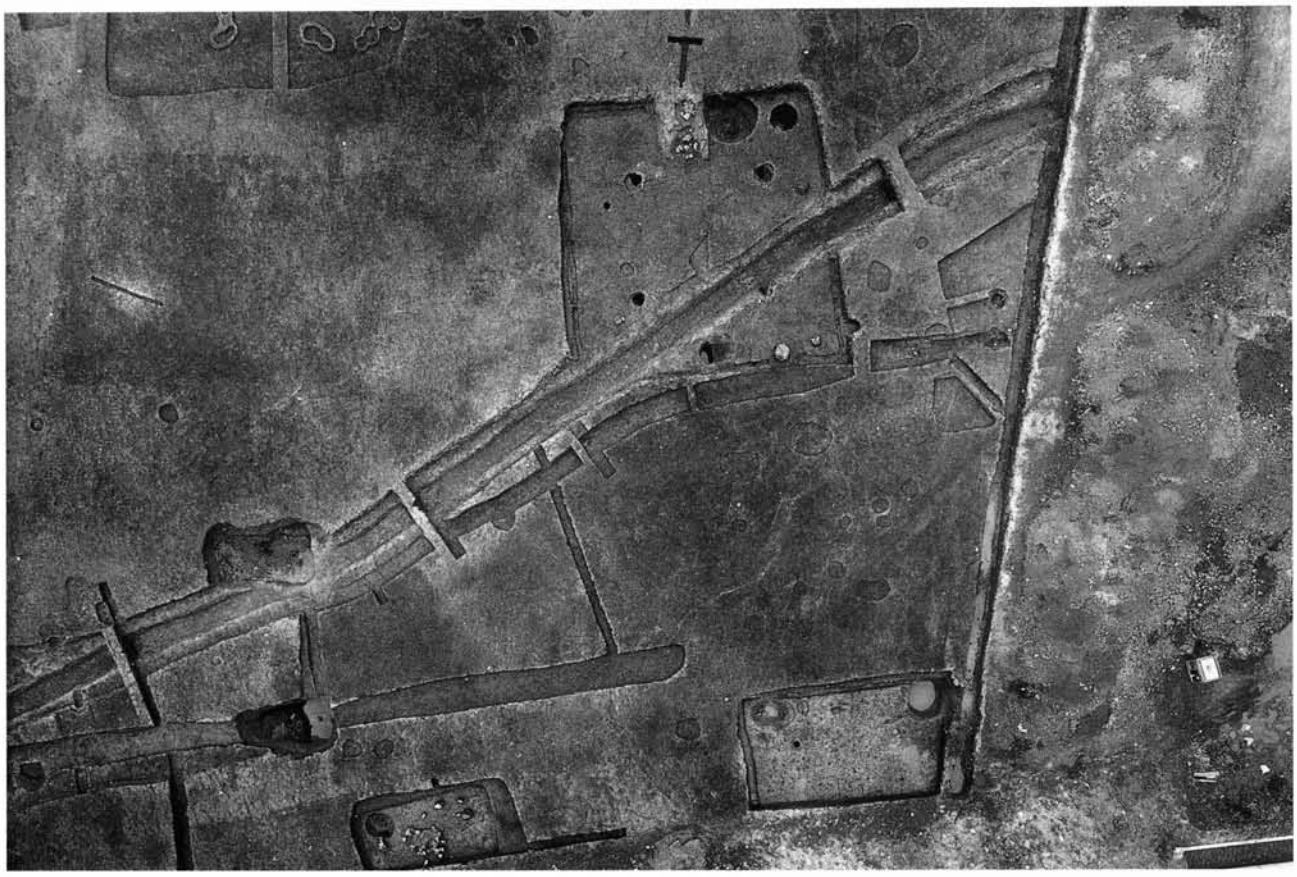
(1) 7区調査地全景(南から)

(2)室橋遺跡南地区近景(南東から)

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

(1) 7 区調査地全景(上が北)

(2) 7 区調査地全景(上が西)



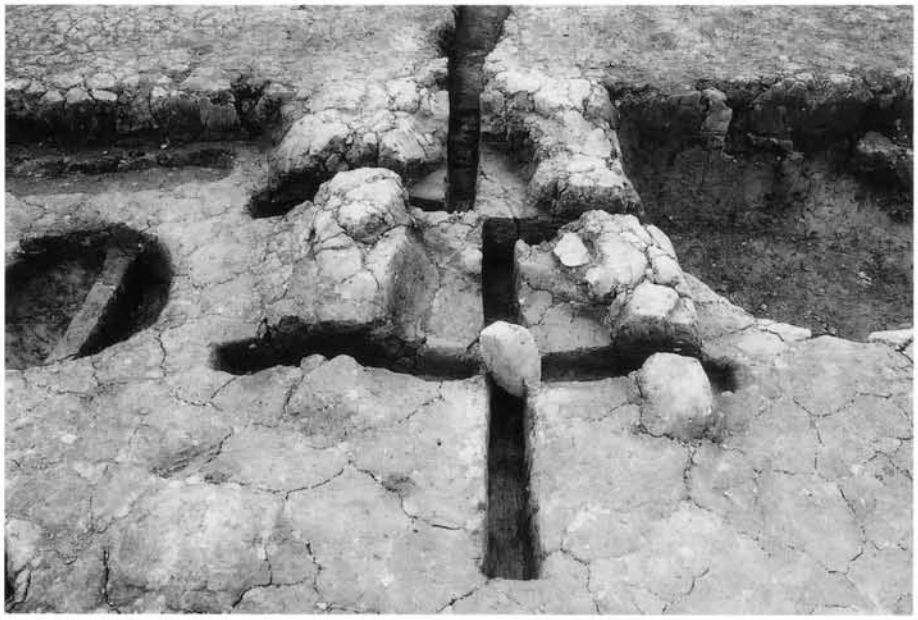
(1) 7区竪穴式住居跡群(上が西)

(2) 7区北西部溝群(上が西)

(1) 7区竪穴式住居跡ＳＨ11710(東から)

(2)同上造り付け竈(東から)

(1) 7区竪穴式住居跡ＳＨ11710竈
(北から)



(2)同上竈断ち割り(東から)

(3) 7区竪穴式住居跡ＳＨ11710
貯蔵穴Ｋ１内土器出土状況
(東から)

(1) 7区竪穴式住居跡ＳＨ11706
（北東から）

(2) 7区竪穴式住居跡ＳＨ11711
遺物出土状況（南から）

(3) 同上床面検出状況（北東から）

(1) 7区溝ＳＤ11705・ＳＤ11707
(北西から)

(2) 7区溝ＳＤ11707(北西から)

(3) 7区溝ＳＤ11707(南東から)

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

(1) 7区溝ＳＤ11707溝内集石
検出状況(西から)

(2)同上溝内瓦器出土状況
(北から)

(3) 7区溝ＳＤ11714・11715・
11717・11718(北から)

(1) 7区溝ＳＤ11715・ＳＤ11717・ＳＤ11718(西から)

(2) 7区土器溜まりＳＸ11720(北西から)

(3) 7区土坑ＳＫ11709遺物出土状況(南東から)

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

(1) 7区溝ＳＤ11707土層断面
（南東から）

(2) 7区溝ＳＤ11705土層断面
（南東から）

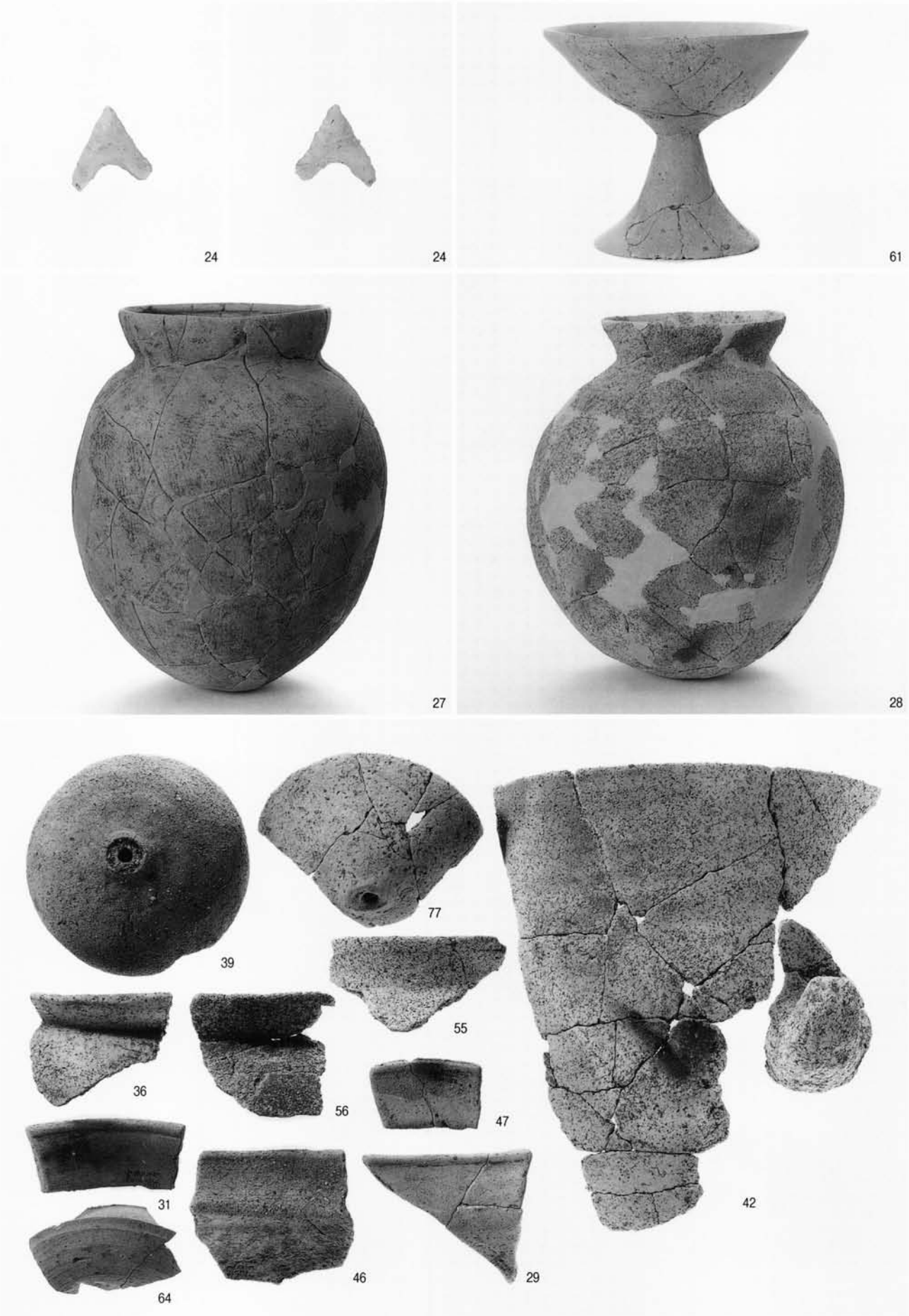
(3) 7区溝ＳＤ11701土層断面
（南東から）

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

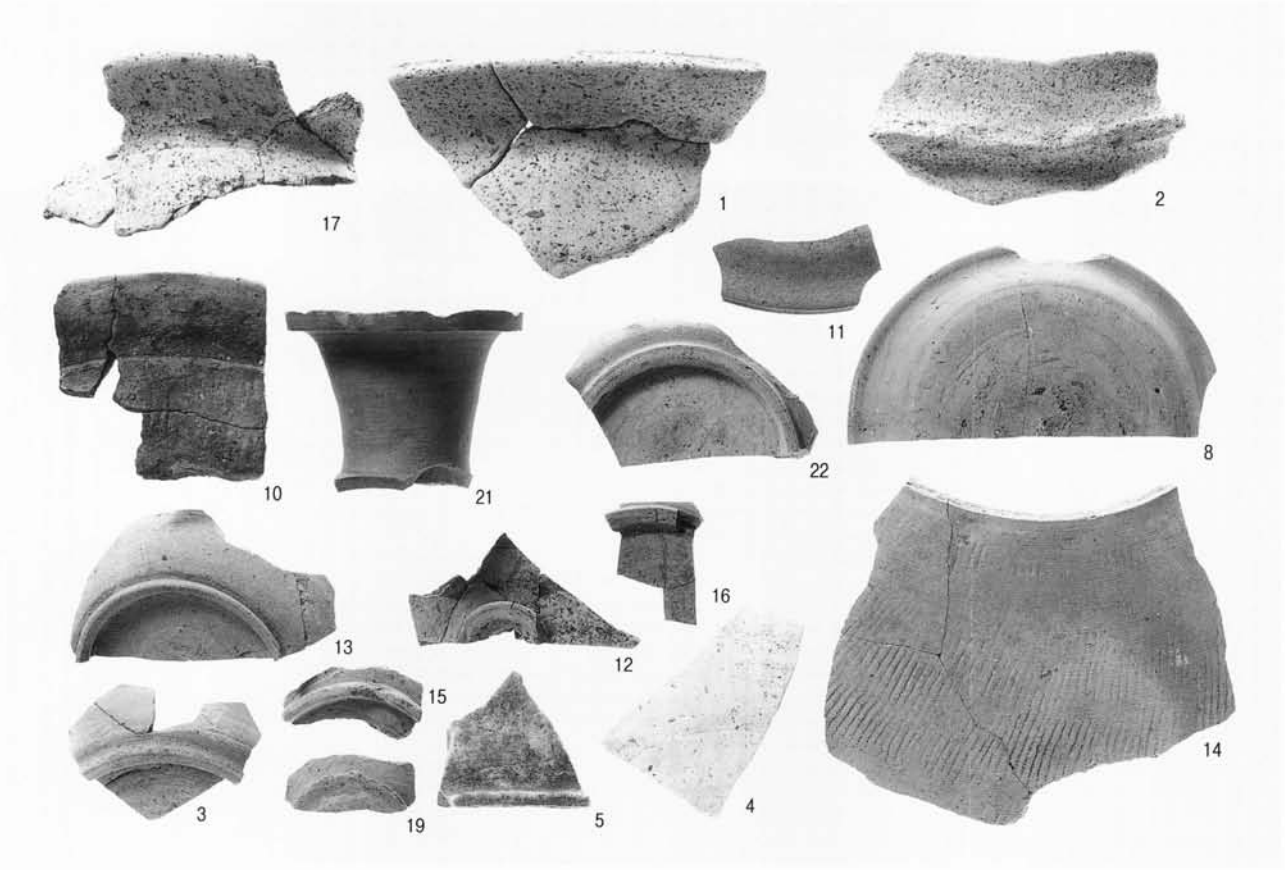
(1)野条遺跡調査地全景(東から)

(2)野条遺跡調査地全景(西から)

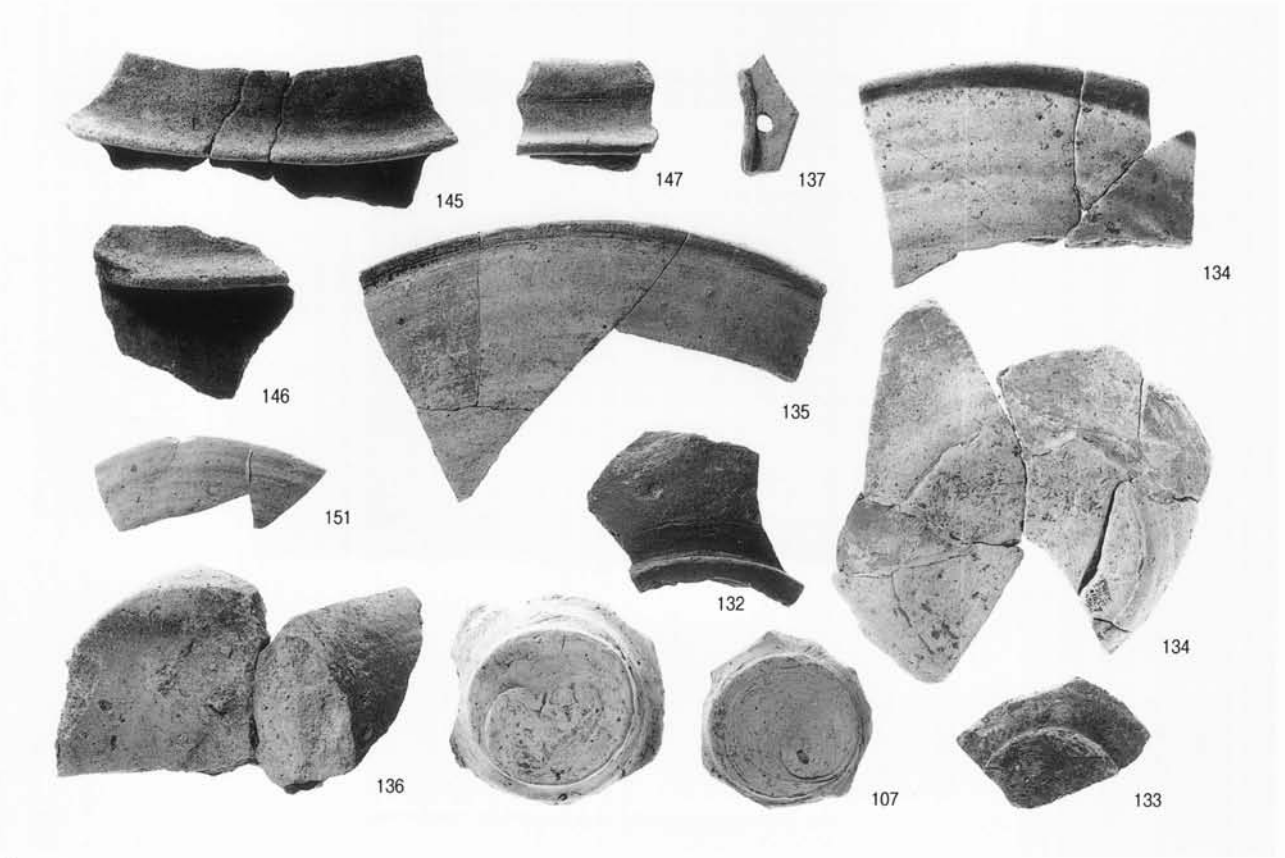
(3)調査地東部遺構検出状況
(東から)



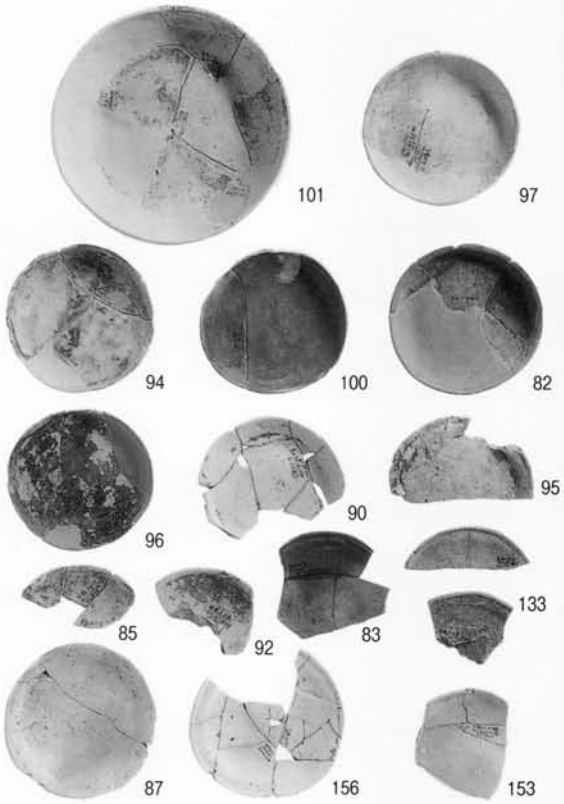
出土遺物 1



(1) 1～6区出土遺物



(2) 7区出土遺物


101
97
94
100
82
96
90
95
85
92
83
133
87
156
153

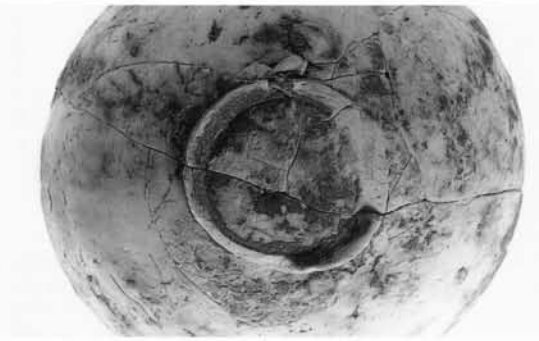
116

113

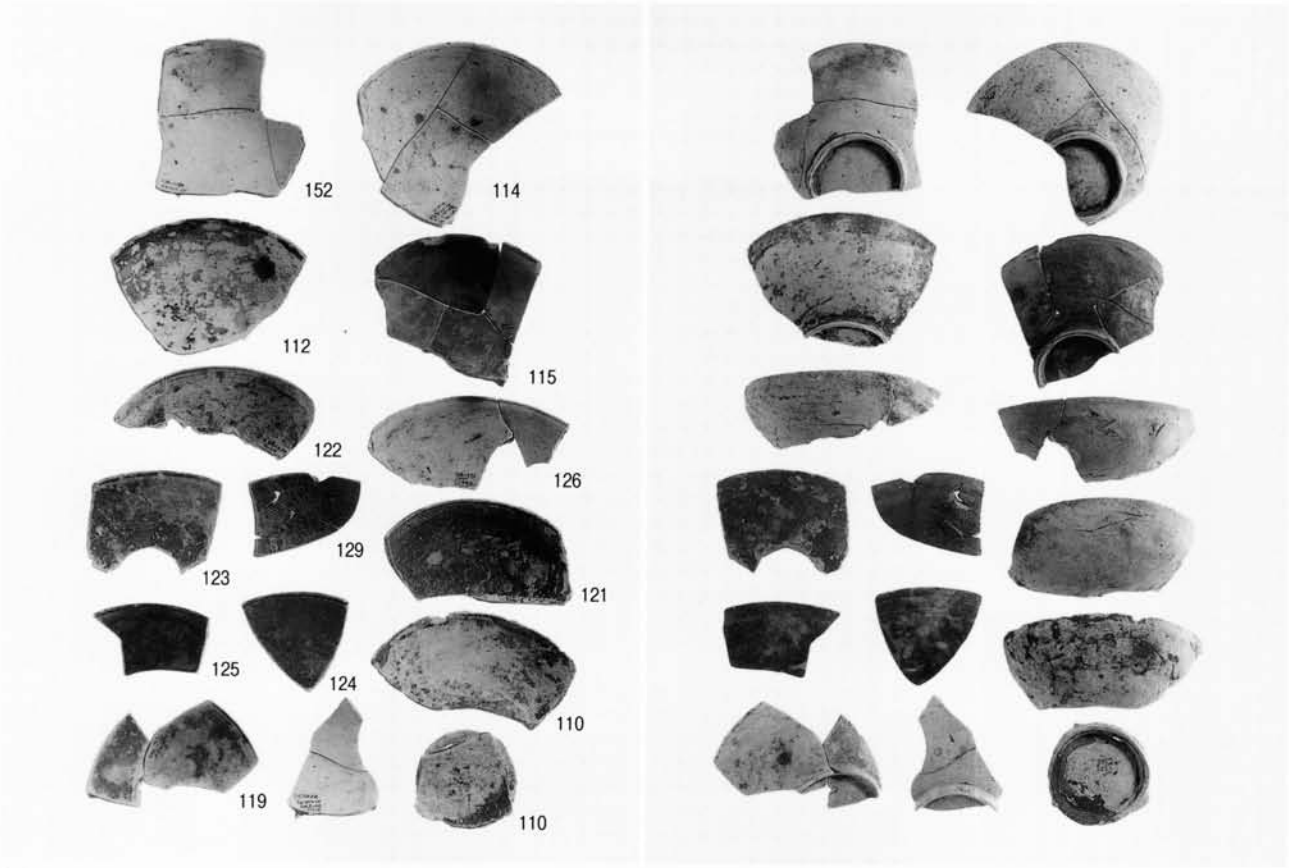
111

18

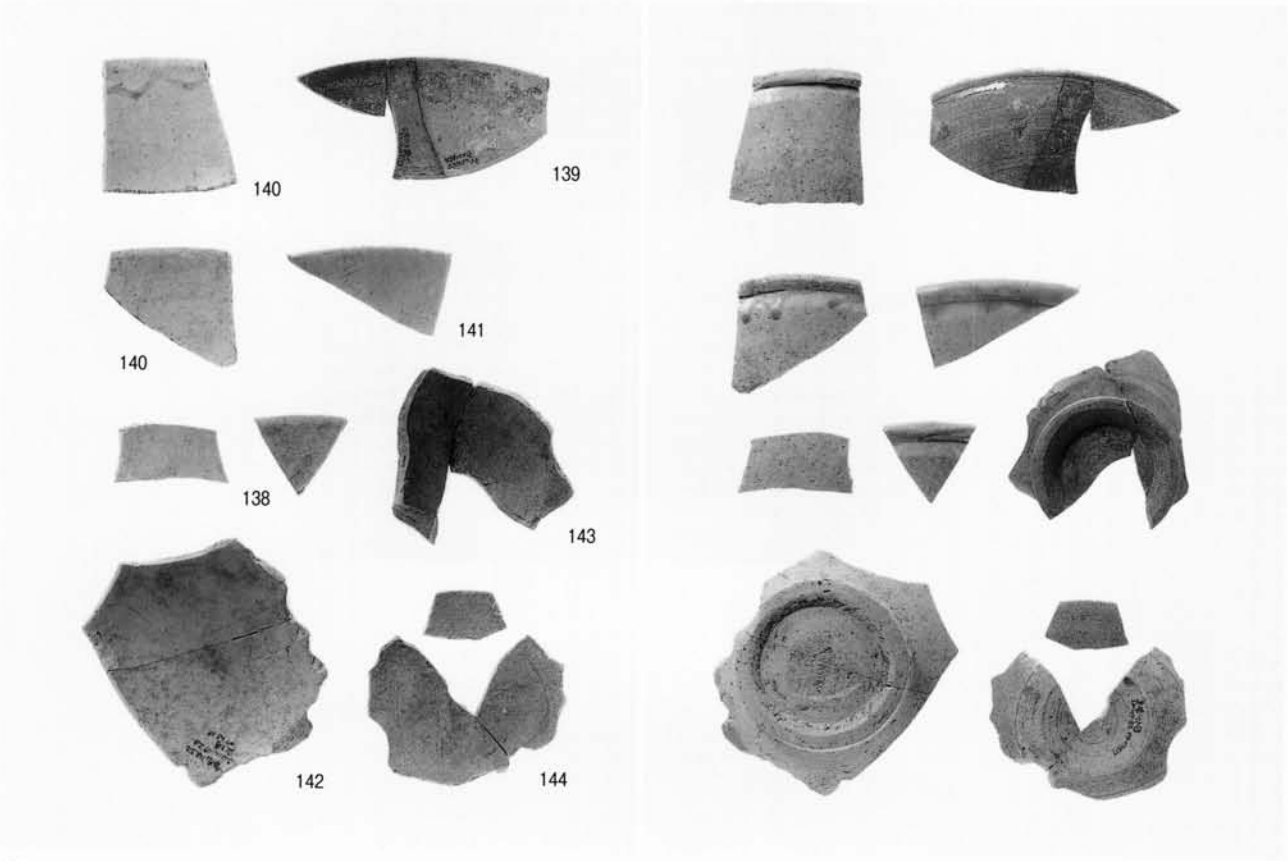
111


18

出土遺物 2



(1) 7区出土遺物　瓦器椀



(2) 7区出土遺物　白磁類